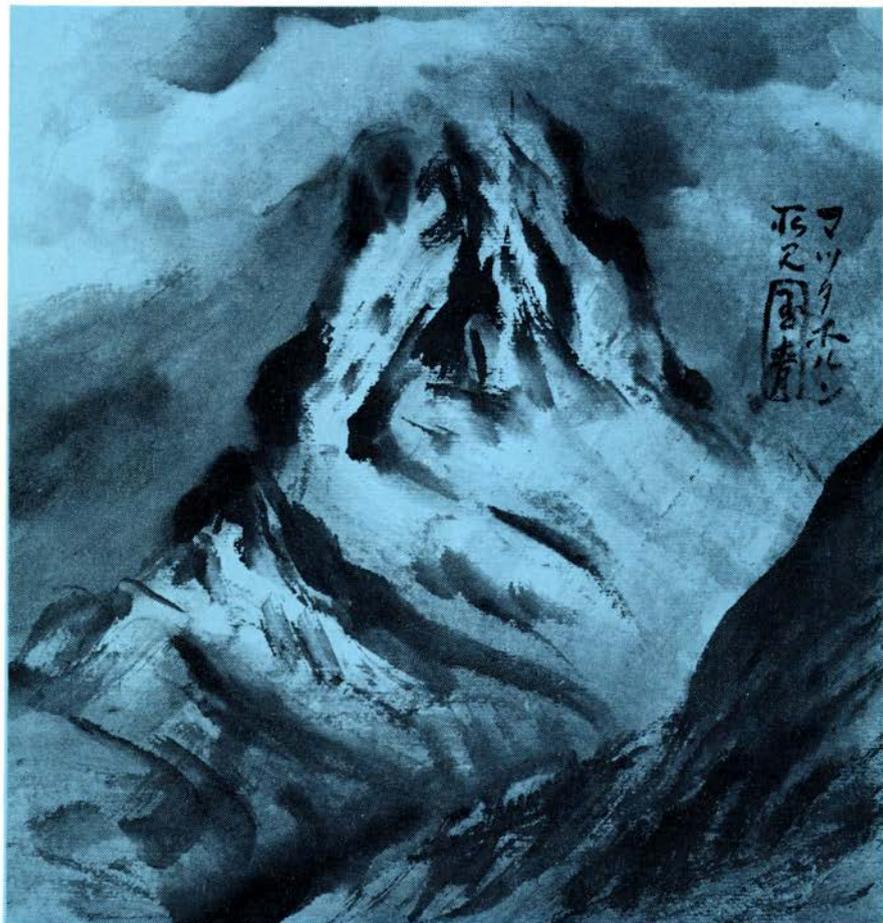


川柳塔

昭和五十二年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷 六〇五号



日川協加盟

No. 605

52年度二賞発表

十月号

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ



ぶたまん やきぎょうざ
豚饅・焼餃子
しゅうまい ちやあしゅうまん
焼売・叉焼饅

大 阪 ・ な ン ば



TEL. (641) 0551

《支店・出張店》

なんば高島屋 心齋橋そごう 梅田阪神百貨店 天満橋松坂屋
中之島サン・ストア なんば新川店・新川売店 ドーゾマ地下支店
ミナミ地下虹のまち鹿鳴 京阪ショッピングモール 淀屋橋サン・ストア
近鉄百貨店 (アベノ店・上本町店・奈良店)

姉妹品大和錦印



柔道衣
剣道具

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

早川繊維工業株式会社

大 阪 支 店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電 話 (779) 1690~2番

鉢の金魚べんちやらが言えず向きを変え

本心を目隠しされてささやかれ

老化現象逆らいきれず独りぼち

落ち目ですいつからとなく妬きつづけ

ご厚意も限度一線はしかと引き

中島生々庵

清涼剤

大阪附近の今年の夏は、関東地方と違って雨が全く降らずに炎天続き、甲子園の高校野球は万々歳。日本列島は二分された形。北海道には有珠の大爆発と何となく異常続き、これでも大地震でも起ったらそれこそ大変と心細い限りの夏であった。ところで先日の新聞で見たことであるが、90歳になった荒畑寒村老が、スイスに行ってアルプスを見たいと言いついで出しているそうだ。勿論自信あつての計画であらうから周囲が案ずる程ではないかも知れ

ぬ。今年の夏は苦しかった等と嘆く輩にとつて將に懦夫をしてたしむであろう。私にとつても百万ドルの清涼剤となつた。老人人口が増加して、問題などと下手な遠慮はいらぬ。血めぐりをよく整え、頭の回転を心がけ老朽を蹴とばす意気と行動力とを常に蓄積してゆきたい。先日の日川協全常任理事会は毎年五月五日のこどもの日を定例総会日と決めた。意義があると思う。

川柳塔十月号

北海道から

正本 水客

青葉のなからエゾ富士とも呼ばれる羊蹄山を望んで、冬はスキーのメッカになる昆布温泉の朝はすがすがしい。今日は午前中に小樽まで出る予定。一番バスはニセコ駅乗換えて、時間は着発だが接続するというので安心していった。バスがニセコ駅前に着くと同時に小樽行が出て行くのが見えた。アッと腰を上げた声に、小樽行に乘れるんですかと若い運転手君が振り向いた。乗換えの客がある場合は警笛を2回鳴らすと向うのバスが発車を待っている仕組みだと聞かされたが、旅人の私達には後の祭り。そのバスを外すと今日のスケジュールが大きく狂って了う。件の運転手君は何と思ったか、お客さんバスの中で暫く待って下さいといつて、ワンマンバスの料金箱を提げて事務所へ遣入って行ったが、間もなく戻ってきて前のバスを追っかけますと私達二人だけに乗せて車はスピードを上げた。十五分ほど走ると小樽行が見えてきた。次のターミナルへ先廻りして車は止った。淡々と廻送してゆくバスの後姿を見送りながら私はとても爽やかな気分だった。大阪などでは想像も出来ないことだけに、今日の予定が狂わなかったことなどより遙かに大きな喜びを私は噛みしめていた。

座右の句

草の絮 飛んでも空は遠すぎる

(葵水)

私の句

地藏さんのまわりは丸し冬の風

若宮 武雄

川柳塔 十月号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

清涼剂

中島生々庵 (1)

北海道から

正本 水客 (2)

俳風柳多留廿五篇研究

(十六) 清 博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原 亮
鈴木 黄・室山三柳・入江 勇・岡田 甫 (24)

川柳塔 (同人作品)

中島生々庵選 (4)

水煙抄

菊沢小松園選 (32)

江戸狂歌太平記

東野 大八 (21)

秀句鑑賞 (同人吟)

工藤 甲吉 (31)

(水煙抄)

岡村久志良 (43)

愛染帖

橋高薫風選 (40)

52年度二賞発表

(26)

生駒から

麻生 葭乃 (38)

路郎選・古川柳の味	八木摩天郎	(39)
茗人忌川柳大会参会記	小浜 牧人	(46)
書評 「再会」	菊沢 小松園	(44)
「鉄道草」	山内 静水	(44)
一分間の柳論	草深 醉升	(30)
雅号ぶっちゃげばなし	野呂 右近	(51)
初歩教室	本田恵二郎	(50)
大萬川柳「昼寝」	川村好郎選	(52)
柳界展望	(庸佑・整理)	(54)
本社九月句会	藤田軒太樓選	(56)
各地柳壇(佳句地10選)	玉置 重人選	(48)
「預金高」	大江秋月選	(48)
「縁結び」	岡村久志良選	(49)
「読書」	(一三夫・葉子)	(67)
編集後記		

座右の句
足音を残そう砂のある限り
私の句
全力投球もう人生に悔はない

沢山 福水

(恵二朗)

○ 登別温泉、11種類の異った温泉を満々と湛えて文字通り世界一といわれる大浴場を持つ旅館を後に、オロフレ峠を越えて洞爺湖に向う。湖畔からバス10分ほどで昭和新山の噴煙を見上げる処に立つことが出来た。新山は昭和18年から20年にかけて麦畑の中に盛り上った四〇〇米の活火山であった。戦時中のことと何の報道もされなかったが、活きた火山が個人の所有であるというのも珍しい。

昭和18年の親山、標高七二七米の有珠山の中腹まではロープウェイが架かっていて、北には緑の稜線に大きく囲まれた洞爺湖、眼下には昭和新山の噴煙、南には太平洋に続く内浦湾が遠く望める得がたい眺望が楽しめた。

それから二カ月後の8月7日、突如として有珠山は大噴火を起こし、地震は未だに止むときがない。火山灰は北海道の半分以上の地域に降り注ぎ、地元付近は農作物だけでなくも百億円の損害とか。火山の温泉として発展してきた洞爺湖温泉はいま火山に追われて無人の街と化している。直径10キロの洞爺湖自体が有史以前の大火山跡だと聞けば歴史の悠久さと自然の大きさも改めて思わせられる。

親切だったS温泉の人達は、素晴らしいコーヒーを飲ませて呉れたB亭はと旅人の想いは遠く切ない。

川柳塔

中島生々庵選

米子市 小西雄々

栄転の荷は荷造り屋にもわかり

積んで崩し崩して積んで祖母思案

恋染し彼女は射程距離にあり

錦着て帰れば邪魔なインタビュ

お見合を素直にしてから運が向き

宝塚市 傍島静馬

愛人のごとく老妻見舞いに来

無性髭病人らしく残しとく

洩瓶にも馴れて病人らしくいる

三食昼寝冷房付で病むベッド

あれもこれも退院後とは思えども

東広島市 高橋鬼焼

八月を呪うケロイドの叫び

光線はあくまで八時十五分

葉包紙明日の鶴をひとつ折る

ひろしまの祈りへ風がなまめるい
風鈴の悲しい音よ原爆忌

竹原市 小島蘭幸

燃えている魂ひとつ逢いに行く

こんな小さな溝にも夫婦橋をかけ

心の豊かさ 数字では負けている

少し肥えてショートカットが似合う妻

妻の留守なかなか一句生まれぬ

大阪市 河野君子

影法師こんな私に素直なり

一生とらぬ幕へ夫婦の喜劇かな

角とれてからの男は絵にならぬ

子の目にはさらしたくなし泪壺

赤裸裸に書けばペン先尖り出す

大阪市 金井文秋

インスタントのように都会の盆踊り

反省会とにかく飲めばよいのです

石けんで洗つて造花生きかえり
仏様へ庭の一輪切りましょう
呼び捨てを九官鳥も真似をする

松江市 小林 孤呂二

登院の日は未だ人間の顔である
七人のモンタージュが欲しい時がある
くわえ煙草で役人の負けていず
女だてらにそんな姿も夏のもの
一日のノルマへ恥ぬ酔ごちち

京都市 都倉 求芽

国宝の鍔には汗など染んでいず
一コロで眠る枕 明日へ一直線
夏ボケの月へ横着な二人連れ
棺送るときだけ黙つた女客
美しい火で郷愁を燃やす「大」

島根県 堀江 正朗

鯛煮える匂いが胃袋ゆすつてる
腹切つた傷も見えてゆく見舞客
握りめし旅に出た子はどのあたり
耳だけで生きるに耳も年をとり
音ひとつびつくりさせて通り過ぎ

島根県 堀江 芳子

ネジいつばいに巻いたら切れる身をいとう
タイミング合わせた疲れだけ残り
いま落ちる雫もまるみ失わず

落ちつきを戻し風鈴ひとつ鳴り
満月が見ている安堵梅を干す

八尾市 高橋 夕花

音楽の余韻の中で別れよう
鏡の隅にすこしロマンを残しとく
一すじの光りにモヤシ遅しい
午後十時家族の時計一致する
いい切つて殊更傷を深くする

岸和田市 高橋 操子

大阪の広さ生駒からみる夜景
ホトトギス鳴くまで待てる歳になり
漬物のあれこれ主婦の座が楽し
一泊が二泊となつた京の寺
亡き夫と娘よお盆の灯がゆらぐ

松江市 柳 楽鶴丸

園児の絵つなげば嘶の国になり
腹がたつともりもり食欲の出る不思議
カツボレ踊り醜男のためにあるような
切り火切るように投キツスで見送られ
人みしりして姿を見せぬ夏の富士

岡山市 川端 柳子

行先を神に家族との別れ（入院手術）
マナ板の鯉も人間性戻し（退院して）
その先に何があろうと川の水
健康な育ちいい夢だけをみる

齒ブラシの彩さまざまに子らは去り

今治市 月原宵明

大阪市 那須鎮彦

綴り方わが家の恥が入選し

小企業専務の妻がお茶を出し

独酌で自問自答の影となる

本当の倅せ知らぬダイヤはめ

おしまいビール一杯妻のもの

今治市 越智一水

枚方市 宮川珠笑

夕涼み膝まくらとはぜいたくな

息切れがしそうだ妻よ見栄はよせ

暮らしから愚痴をわすれてあつけない

米作り機械貧乏に追い込まれ

汗をかくほどに米価は上げられず

松江市 中川晃男

和歌山市 野村太茂津

終戦記念日今年もひとり考える

華やかに墓よみがえる盆供養

休んだらリズムが狂う労働者

出がらしの番茶で茶柱立ちました

年取らぬまま御仏の里帰り

宇部市 平田実男

岡山市 嘉数千代香

あがるなど言う監督もちとあがり (甲子園雑感・二句)

砂袋ぬらす涙の尊さよ

冷葉屋がうっかり愚痴を言う暑さ

義理固い顔で中元売場混み

夏休み水銀柱と妻のヒス

八尾市 香川酔々

無口な男だが能弁な汗流す

静物のリングゴのように父黙し

もてもせぬ夫と見抜いたへらず口

陽当りの半分さけてゆく日傘

朝顔の前で噂がばらまかれ

出稼ぎが都会の日焼け持ち帰る

アパートに囲まれ墓石おちつけず

歩道橋つけてやつたと昇らせる

ほつとして自動改札出た切符

戸車が直つた音で戸が走る

生きねばならぬ亡^と戦友^もの命を道連れで

老兵の言葉の裏にある懺悔

負け犬に差し出す朋友の手は異国

老兵の傷秋来れば秋疼く

すまぬとは思うが老兵まだ消えず

倅せな帆が風朶む今日佳き日

帯解けば砂の崩れる音となる

白足袋の小はせにおんなしばれる

行間のそのぬくもりの中に溶け

忘れないことをぬけぬけ衝いてくる

忘れ得ぬ人煩惱の鉦が鳴り
風化仏疲れ切つたる貌になり
無縁仏の影にかくれた蟻ひとつ
電卓ではじく命が味気ない
熟れている西瓜が甘い敗戦日

大阪市 神夏磯 道子

雑巾を縫う喜びを忘れてた
生きて行く今日のいくさに背をのばす
夫婦坂夫の気合いがもの足りず
故里がテレビに写る台風禍
玉のように育てた子供に無精ひげ

柏原市 大峠 可動

信じ合う日が楽しくて花を摘む
曲り角生きる心の文字を嘯む
親友の握手は虚勢を捨てている
点滴に注射加えて風船だ
自信が欲しくて一歩一歩誠実に

生駒市 草深 醉升

喘息の身の置きどころなし夜のしじま
好きな時好きなだけ飲む妻の留守
あすの日もわからないから出る元氣
飲めぬのが死ぬよりつらいと医者通い
さ来年食べる分まで梅を漬け

倉敷市 小幡 里風

見ぬ振りで盗む女の すれちがい

雑談の中で拾った 小さい知恵
手のひらで掬う清水へ列が出来
曲り角つい札束にけつまずき
全身の冷汗アリパイ崩れそう

島根県 榎原 秀子

百日紅酷暑いとわず炎えてみせ
湯どころのわびも時代へ流される
快晴のダムは見事な水鏡
夢のない子供神話を受けつけず
ときどきは心のすみに鬼が住み

大阪市 藤田 頂留子

逆風に太刀打ち寡婦は身がまえる
おもわくを秘めて女は白うぬる
蓮華今墓前の読経へ聞くよう
盆休み都会生れでお留守番
原爆忌今年も懺悔をたしかめる

愛媛県 渡辺 曉童

立秋を得た とがる頬骨
のむものまぬも 遠来の友
雲に目をやる 既に勝算
自戒にすぎて 自信そう失
狂い咲くには 痛む足腰

呉市 槇田 英詩

愛情の誤差一ミリで褪せる愛
水鏡海女がおんなに戻るとき

陽が落ちて五尺の影が背伸びする
祖母の背は女の業をみな果たし
妻の手が俺に戻つた子の巢立ち

青森市 工藤 甲吉

一畳のあるじとなつて高野
身から出た錆では他人にも言えず
反芻へ妻あの世から生きて来る
秋風へ誰か来し方想わざる
馬印マツチに出合うなつかしさ

諫早市 原田 明春

大物の恥は恥でも箔をつけ
借金の恥言うて寸借里があり
冷たさは金の切目を知つたとき
ガードマンこうもりのように夜を出る
合鍵の数が揃つて取る夕飼

大阪市 河井 庸佑

要領のいい子に先生ひつかかり
親のするように育つた子を叱り
親の子と思えば成程なと思ひ
先生に言うとおどして子を躰け
反省はしているようには見せておき

倉敷市 野田 素身郎

抵抗の報い辺地で年を取り
本持つているから大学生だろう
飲歌う若さを羨むほかはなし

鈴虫の生まれは哀れ壺の中
長男は齒科 長女は耳鼻科夏休み

岡山市 時末 一灯

受皿をつくれ予算を少しやる
炎天のドラマみみずの死と蟻と
お天気と野球 話題に無事な人
急患児抱く母汗のまま縫り
原爆忌平和な汗をいとおしみ

東大阪市 落合 思月

頼られて善人重荷を又背負ひ
一合の酒で肩を叩きあい
妻の吹くラツパに今朝も送られる
昂ぶりを押える言葉見当らず
受判は押さず父は腕をくみ

堺市 高橋 千万子

胸さわぎ久方ぶりの封を切る
焼香の順たしかなり嫁の座
目さましの次にひびくは母の声
涼しさをもとめた高野で毛布借り
にせものもここまでくるとは冴えた腕

尼崎市 黒川 紫香

墓参する手桶片方孫が持ち
握り飯親子三代つまむ丘

孫東京公演(一句)
東京で孫の笑顔へ手をかざし

ニヨキニヨキと建つて都会の狭い空
暑うおまんなどは大阪でのご挨拶

倉敷市 水粉千翁

わが道を行く風の日よ雪の日よ
からませて指に信ずるものばかり
平凡に余生をめくるのか風よ
わたくしを待つ終点が掃いてある
何事もなかつた風の音を聞く

倉敷市 稲田豊作

一と言の多きは父の威とならず
愉しげに軽い句囊をぶら提げて
むだ足と知つて世話人汗が出る
肝腎な話だ家族輪を作る
お隣りさん猫の土足は困ります

八尾市 宮西彌王

向き合うた女の爪が伸びている
淋しい日の朝は花の種を蒔く
雑草に埋つた墓に来て詫びる
墜ちる日の一番星は見つからず
逃亡の錠 元栓たしかめる

神戸市 仲どんたく

紫陽花の愛心怨む開票日
三世紀生き抜く慾の八十路坂
ひとしおにきびしき夏の妊婦服
クラス会不老長寿をテーマとす

決心がやつとついたか猪口を干し

倉敷市 藤井春日

融通の効く役人は首にされ
静いのを鏡の前に座し
見守つて呉れる母ありそむけない
古手紙母の教えが胸を突き
生前のお礼妾宅へも届き

貝塚市 行天千代

神経痛の姉に内緒の旅仕度
伊豆の旅バスから海の底が見え
ロマンスの天城峠はバスで過ぎ
了泉寺お吉の乗つた破れかご
こんがりど日焼けて伊豆の旅終る

大阪市 本多柳志

終点まで終らぬ愚痴と乗り合わせ
夏バテるいのち培ううなぎめし
低音で話題の変る電話口
この人にまだ任せられぬ車中談
屋上の政治を叱る大ジョツキ

富田林市 板尾岳人

母の掌の中で見つけた峰の石
父と来た峰に昔の石がある
父の年令まで登る山の峰
蠟燭の灯りで闇の峰照らす
父の留守山の便りに雪がある

大阪府 不二田 一三夫
隅「1」で9回裏の守備につき
三つになった五つ子(二句)

孝行の最初 産ぶ声高くあげ

子が二人あるにテレビの郷ひろみ

鈴つけて猫を捨てるに人の子は

「まず窓を開けて」と 貼り紙した心中

米子市 林 瑞 枝

一匹のどじょうの抵抗へ川は澄み

百葉の長 楽しんで持つジョッキ

イヤホン耳に男の子守唄

郷愁の湧く手づくりで招く膳

松江市 恒 松 町 紅

立秋へ妻もビールの泡に馴れ

人生のドラマを区切る定年期

人事異動出世に遠い目で覗き

愛妻家といわれる人の几帳面

竹原市 三 宅 不 朽

登るはたのし降るはさびし坂の灯よ

旅ひとり水の流れを思う橋

満一才花弁のごとく靴おどる

夫に耐え子に耐え孫に耐えて母

竹原市 山 内 静 水

炎天の影動かない原爆忌

風化してならぬ原爆忌の祈り

考えて考えて極限に達したり
ヒロシマを書く鉛筆の芯が折れ

東大阪府 竹 中 肖 二

古里の井戸に西瓜が冷えていた

浴衣着の女絵になる夕涼み

出張の余徳を湯泉疲れて帰り

七人の敵へ光らす朝の靴

島根県 小 砂 白 汀

出す方も見る方も臍など気にかけて

ブランコがたがいちがいに振れて昏れ

涙腺の固いおんなで嫁きおくれ

淋しくて三面鏡を買いました

竹原市 森 井 菁 居

反戦歌忘れ不足がつきまとい

レモンティー妻を少女の日へ戻し

貸し借りが無い日めぐりで恙し

墓掃除口癖にして父が老い

鳥取市 小 林 由 多 香

ライバルの暑中見舞いへ闘志わく

賞与まだ出ぬ残業暑に耐える

ジーパンを嫌い若さにけむがられ

転った玉を探している落目

大阪府 天 正 千 梢

死に華を咲かすくちびるぬれている

噴火口をおさえいつまでたえられる

「子供ほしい」と言わぬ夫の酒乱めき
犬の服縫うてうまず女孤をうずめ

美禰市 安平次 弘道

神様の脚本にない安楽死

暇つぶしになつたとパチンコ負けて出る

夢のない男は地図をもてあまし

訓練に満足地震を甘くみる

兵庫県 河原 みのる

病気せな損やと思う保険税

山尊し幾億年の俣で石

遠耳をお達者ほめるでだてにし

ああ今日も命与えられた朝

和歌山市 若宮 武雄

生きている不思議つくづく終戦日

ありがたくまた意地悪い妻のケチ

怒つたら損 ソロバンは知りながら

丸すぎて思うところに落ちつけず

大阪市 本間 満津子

ガム呉れる孫には入れ歯困りはて

スタミナ食老いも酷暑に挑戦す

台所嫁に譲つて長い午後

故郷の秋 彩とりどりに届けられ

八尾市 大路 美幸

高野山 此処も人間多過ぎる

奥の院の賽銭箱が大き過ぎ

頂上の視野はロマンになつて
残月に叱られている終電車

富田林市 和田 維久子

人生のうま味知らない銀の匙

かりそめの夢をむさぼる熱帯夜

タイムトンネルに塗り込められぬ色もある

吹けば飛ぶ壁に凡人うろたえる

滋賀県 溝口 はやを

横顔で話を受けるえらい人

大声で責めても肚が透けて見え

故郷に墓だけ残り水臭い

昼寝する臍安らかに浮き沈み

寝屋川市 宮尾 あいき

雷雨一過涼しい顔でお月様

風鈴へ深夜の風が逢いに来る

迷い子のトンボに一夜の宿を借す

盂蘭盆に夫の夢を期待する

大阪市 小出 智子

母親でいる日のあまいパンを焼く

諦めはわたしにもある蟬しぐれ

掃除機とおんなじことを繰返す

迎え火を焚く人生も半ば過ぎ

和歌山市 吉野 富子

排ガスを吸いやすい朝のバスを待つ

女には惜しい変身する勇氣

ロマン追う女夕やけ雲が好き
ポリバケツさげてぬかみそもらいに來

藤井寺市 児 島 与呂志

沈黙へ笑顔をそえて茶を替える

夏やせへ西瓜が赤く冷えている

お見合いに男のクリームとけている

孫連れて帰れば近所が寄つてくる

岸和田市 植 山 武 助

吉日だから冒険もして見たし

喰べさせて嬉しラツキヨがよく漬り

予報屋に勝つた私は傘を持ち

涙腺のゆるめる時を知る役者

和歌山市 内 芝 としよ

寝たきりの窓辺に雲のドラマ見る

強がりの後姿が哭いている

六十才皺も愛嬌の化粧する

共稼ぎ今夜は浴衣の夏祭り

岡山県 出 原 敬 一

宮内庁夏に手袋よく似合い

母と子の花火へ軒の犬も寄り

雲去来蝦蟇は昨日の場所に居る

地へ還るひと葉は亡母の許へ散り

松江市 岡 崎 祥 月

神様にすがり歩調を乱すまい

年金をあたため細い計をたて

御破算の玉が赤字の線を引く
年金の城に老馬灯をともす

竹原市 時 広 一 路

九回の裏で自信のある気魄

二つ目の顔用意してドアを開け

水引きに嬉しくお金包まれる

蟻の列足を早めた風も秋

鳥取市 大 塚 豊 生

水着きてせめて遊ばすミニプール

おだやかな笑みで一歩も譲らない

寝化粧を忘れず妻の座を守り

本棚に空しくひびく不合格

藤井寺市 西 いわを

弓なりになつてこらえる竹の節

せん振りを飲んでスカットした胃の腑

熱帯夜うちわの涼は汗さそう

楠の木を揺り動かして蟬の声

兵庫県 大 江 秋 月

マニキュアの手が引く草ははかどらず

沢庵の石にも亡母の艶が見え

帯しめることも母呼ぶ娘に育ち

目覚しを三つかけとく妻の留守

米子市 石 垣 花 子

老夫婦禅問答に似る対話

逆転へ泪と汗の応援団

一匹の蚊から話題はぐれ出し
かみあわぬ育児法姑が折れ

大阪市 黒田真砂

心の傷包むベールが見あたらす
松の枝はらつて夏を涼しくし

三面鏡へ或日孤独な影の彩
ビールパイ師も老い給うクラス会

鳥取県 林露杖

善人の素顔臆病にも見えて
悔一つ礫となつて返る夜

捨印のような役目に甘んじる
愛猫の輪禍舗道の血を拭う

大阪市 川口弘生

ひまわりの中にも居てる小數派
ゴキブリの方が地球の先住者

生命までとられぬと決め箸を割る
クーラーの故障で窓が見直され

泉大津市 村上春巳

愚痴つばくなつてそろそろ老年期
無いくせに戸締りだけは見て廻り

親馬鹿のそしりを喜しく思う日で
脱サラへ疊泳法もう溺れ

西宮市 若林草右

有珠山噴火(二句)
昔なら年号を改え護摩を焚き

白百合のお色直しか鹿の子百合
倒産をする程金も借りられず
二日酔い夫婦随でする朝寝

姫路市 梅谿庵 不醉

以下同文偉いつもりで居た私

斬り合いをすまし楽屋で飲む話
もつれ糸切つて仕舞えと短気者
あやしいと言わぬが妻は油断せず

倉吉市 奥谷弘朗

ゴキブリのような気性で世を泳ぎ
匂いでもかげとメロンの見舞来る
借金の額まで知つてる隣り組
根性はあつても金がついて来ず

大阪市 神谷凡九郎

死ぬまでは生きてる当り前のように
神仏空気はどちらでおわします
小さい罪と不遜な人が評価する
今日と云う一日考えて見ませんか

大阪市 中川滋雀

寝つかれぬ枕をずらすひとり言
早天の慈雨に足りない虹をみる
孫のしぐさに遠い私の影をみる
夏の墓輪廻の悔いを積むばかり

大阪市 山川阿茶

張りつめた心の縁の切れる時

夕涼み浴衣の似合う京訛り
バーゲンで買ったと云わぬ輸入品
半分は観光用にする祭

大阪市 西 出一栄

太陽を慕うひまわりの首の位置
ゴギブリを打つて天下をとつた顔
曼珠沙華入道雲へ紅うつす
秋茄子の紺の強きに亡姑偲ぶ

守口市 野 呂 右 近

地方色添え汽車弁の味もよし
来てよかつた北アの山々機嫌よし
学歴はさて置き正論なら正座
出て打たれ出ないとそのまま朽ちる杭

高槻市 若 柳 潮 花

熱帯夜みんな起きてるビール抜く
広告の裏にちいさく妻のメモ
一銭だ五厘だなぞとうまがあい
燃えつきてゆく青春のタクト振る

東京都 山 根 白 星

こめかみの激怒を見てる嗜虐の眼
同志討ちさせる策士の声低め
驚きは訃報に驚きさえもせず
ポスターのビールの泡と満員車

鳥取市 河 村 日 満

咲ききつていのち短かし夏の花

雑草の半分枯れてきた余生
姉の愚痴妻に委せて昼寝する
一、二日ならちやほやとわが家でも

鳥取県 鈴 木 村 飄 子

詩囊から清き雫を絞らんか
旗に書く文字に正義というがあり
ハイヒール子を負う型に出来ていず
首振つて扇風機さえ媚を知る

和歌山市 沢 山 福 水

拾われてまた捨てられた一円貨
雑居ビル管理のミスをなすり合い
ケロイドのありし写真へ手を合せ
八月の雲ヒロシマへ目が痛む

倉敷市 田 垣 方 大

多感なり愛の流れをのりきれず
み仏の慈悲蚊とんぼもつらなつて
踏まれても低学歴のたくましさ
葉がゆれる風が足跡残すよう

東大阪市 市 場 没 食 子

毎日 日曜妻嵩高いことならん
年寄りの結構な御世にめぐり合い
年金で暮し墓場が見えて来た
若死の母だつたなア五十回忌を勤め

豊中市 戸 田 古 方

山の宿ふすまをとれば大広間

小さいからこの鮎やと思っておく
山の湯でひと夜さながら避暑とせり
買物をすればお茶をと城下町

東大阪市 齋藤 三十四

口紅の赤へ嘘を塗りこめる
大軒き隣りの襖たたかれる
ぶつかき氷汗はびつくりし
分譲地とうとう山に手をつける

竹原市 鈴木 かつ子

歯が痛い声とは知らぬ電話口
働いて流す汗から湧く希望
悴せはあなたの為にするおしやれ
三面鏡どつち向いてもいやな鼻

出雲市 原 独仙

囑託となり刹那主義よく判かり
片割れの月が不首尾の背を撫でる
クーラーより明治に涼み台の風
土曜市戻りは孫が背でねむり

鳥取市 両川 洋々

一票にされてる握手とは知らず
まだ思案決まらずゆるい帯を締め
朝令暮改の法を役人振りかざし
叱られに行く日もおんな帯を選ぶ

大阪市 室谷 徹舟

逃げ腰になるから指名とんで来る

捨てに来た筈のストレス捨てきれず
体験を生かし余生の波素直
ジーパンもヤングがはくからよく似合い

宝塚市 小島 無聖

うそうそと好きがうれしい嘘にする
病む床に芙蓉の花も凋む日よ
看護婦に見舞をもらう程に痩せ
青い目の歩幅を止めた垣根越し

島根県 錦 織文子

喜びも愚痴もこぼして垣根越し
根性があればと明治くやしがり
見送つて一人つぶやく大欠伸
サングラスかけて別世界に住んで見る

氷見市 関 美子

肩の手を軽くないなして母の粹
しまい風呂しばし休める心の百度石
散り急ぐもみじに追われた出稼ぎ荷
辻地藏犬にも犬の村八分

大阪市 津守 柳信

パカンスも口に出せずに居る不況
眠るのが惜しい夜更けに風があり
裏切らぬつめも真赤で生きつつけ
健康のまぶしさを知る四十坂

橿原市 岩井 本蔭棒

花道を男の意地は振り向かず

からだごと座席へ放り出す残暑

明日はどうなるうとスラム昼の酒

灯籠になつてもあちこち引つかかり

今治市 長野 文庫

退屈な主婦セールスをカモにする

古きずが有つて善行割引かれ

裏話聞かされ腹を立て直し

けちくさい性根出すなと青い空

西宮市 藤村 ベ 女

美しいムード私も弱くいる

平凡な生活余生に逆わず

非行少女ガム噛む顔のあどけなし

ブランコの子が夕やけへ散つてゆき

仙台市 川村 映輝

孫がきて無口もはしやぐ夏休み

弱虫に強い女房が居て平和

住宅ローン終らぬうちに事故に遭い

鳥取県 清水 一保

あの頃の想い出脳裡に蟬しぐれ

胸襟を開いてビール追加され

落選のポスター公約まだ叫び

新宮市 大矢 十郎

悩みもつ人もあろうに盆踊り

環境に従い金魚泳いでる

天国へ行く牛に逢う目のやりば

走馬燈昔むかしの夢廻る

華やかな女よ紫ゆるく着て

五目ずし親子を遠い日に戻し

富田林市 岩田 美代

角張つた肩から崩れる角砂糖

流通をはばまれ不興のビルの風

毎朝を仏壇にすがるエゴの数珠

西宮市 島居 百酒

通行止めついそこのに廻り道

仰天の蜘蛛は卵を捨てて逃げ

妬き合っている間は来ない倦怠期

東大阪市 竹中 綾 女

両親が支えてくれてる転び方

嫁ぐ娘とだまつて祭り囃子聞く

片隅でお茶を汲んでる自尊心

和歌山市 垂井 千壽子

雷にしばらく此の世まかせとく

服代えて今朝のこころを区切りたく

蟬しぐれ和服は汗をかかぬ女

兵庫県 遠山 可住

サラ金に泣く愚かさを笑われず

風鈴をあちこち変えて夏喘ぐ

中元の量が羽振りを物語り

堺市 藤井 一二三

豊中市 安藤 寿美子

気がつけば踊っていたのは私だけ
会いに行く白髪と知らず染めてやる
みかんでもぐようにみの虫もがれたり

倉敷市 松井俊風

干し草を運んで秋の風ばかり
雲の峯病後の弱気まだ残り
糞虫は落葉の底で生きつづけ

京都市 松川杜的

京の町家をたずねて

せともの市裏から眺めてバスの旅
二つの繁みに一つ一つの東山(無鄰庵)
お琴一めん太夫の涙が映つる部屋(島原輪違屋)

大阪市 江城修史

逢うことの遠さにうすれゆく絆
執念に生きた命に消した過去
昏れ急ぐ茜にノルマ追う夫婦

岡山県 竹内翁童

老木のひっそり咲いた美しさ
雨祈る農夫へ太陽の汗光る
温情の退職勧告だと知らず

下関市 国弘半休門

老兵は火のない火鉢に似て寒し
七十才子等には角のとれぬ父
後輩が僕追い越して死を急ぐ

平田市 久家代仕男

定年も近く惰性の水車
酔す客へ雨足いつそひどくなり
結論を持ち越し煎茶淹れかえる

京都市 山本規不風

割れる場を想い選つてる陶器市
無精髭でない剃るのはまだ早い
綺麗なマダムを横目でみるマダム

桜井市 岩本雀踊子

吸いこまれそうな夜空にある眩暈
中年の足がもたつく道しるべ
旧盆へ口紅落した娘が帰り

堺市 伏見茂美

緑陰で汗拭けばセミに追い出され
蟬しぐれ水銀灯のまだ消えず
肩上げを下してもらおう盆おどり

米子市 増田竹馬

いける口甘党亭主にちと不満
強情を張れば張る程孤独感
スムーズに教養が裁くハプニング

大阪市 西川誓二

盃蘭盆会廻向

亡き父母にせめての供やお茶供う
望郷切切電話の向うと母の声
故郷へ皆発ち飯場昼休み

唐津市 新岡回天子

ほどこしの金も用意のうちに入れ
富士登山メンソレ貸してやる功德
穀割らぬ敵と知つてかカタツムリ

大阪市 横地雅風

飾りたい女は時間に欲がない

寄港地のロマンは歌謡の中で生き

方言が標準語だと郷自慢

和泉市 西岡洛醉

悠々自適盆栽の青に溶け

三面鏡横から見透れそうな顔

背信の指小刻みに震え帯び

和歌山市 津田与史

長生きのそだけ気が合う早起会

ゴキブリも生きる権利の足で逃げ

暑さにめげず目減りにめげず汗払う

伊丹市 榎谷漫柳

値段表上げると真珠よく売れる

五十円切手は大事にしなれば

あの人の時計は今何時だろ

大和郡山市 森田カズエ

気短かな男の好きな冷やつこ

仲直りしてねと猫の目がみつめ

追い立てるように豆腐屋リンを振り

和歌山市 小川佐知子

子のための白旗心は負けていず

押しつけの親切とは露思つてず
寝転んだまままこれしろあれをとれ

姫路市 大原葉香

おちたヨと硬貨地面で音をたて

選挙違反する程実力ない私

戦列を去れば暑さも一入に

大阪市 神田秀峰

CMに良く出る力士弱くなり

気温には敏感過ぎて風邪を召し

山削り海埋め立てて新領土

岡山県 直原七面山

噂さの女の流す流し目

演技と見えぬマダムの惚れよう

組み敷かれたので燃ゆる外なし

尼 緑之助

真善美追求煩惱離れない

欲望は生けるしるしよ鐘たたく

梅干とジャコでも飲める曲り角

盆の客集中豪雨孫十人

昼も夜も野球テレビの盆となる

浜田 久米雄

馬鹿らしくドラマへ頭など使い

連続のドラマへ朝の茶が美味い

出かかった怒りの声を咽が止め

持ち上げる石限界の力なり

秒針で男と女別れたり

無事祈る老眼鏡が地図を追ひ

山門のしじまに心洗われる

シヤボン玉みたいな媚びを買わされる

膝小僧とペタルが妥協してくれず

口紅をあつて直せと水蜜桃

知床半島

霧はいちまいずつ剥れて岬を船まわる

浪はむせんで岩礁の怒りしすまらず

クナシリは狭霧のなかに音もせず

海から滝が登るかと見え崖迫る

知床連山 海にそびえて大地果つ

日々小言返事ハイハイだけになり

桜花の雲に浮き上がつてる篠山城

築城の粋を積上げ井戸に見る

緑蔭に憩うて乙女に詩を醸す

爆発もしたかる有珠山ならずとも

世間ずれて返事は玉虫色になり

働いてる母だ煙草ぐらいはとがめまい

能面の涙は腹の中へ落ち

一方通行つゝの慕情へ青が出ず

本田 恵二朗

正本 水客

小西 無鬼

菊 沢 小松園

他人を捨てる夜の覚悟は疾うに出来

お齡ですとあつさり笑う第三者

無題の絵残し女ふり向かず

ニユールツク撰つてる女のニユールツク

反省のかけら男の迷うとき

根負けしそう妻はまだ病床

うみなりのいよいよ高し若人忌

(祝竹原川柳会二〇周年)

情熱は未来へのびる竹の青

新涼や事務よく見える玻璃のビル

走馬灯むかしむかしの恋仇

七月よ煙草の輪にも力あり

裏切りに思い当るは茄子のかるさ

氷柱花電話ボックスには女

きりぎりすちよんと男は立ち上る

白描の絵巻となりぬ愛慾も

出世とは何 瞑想の七十五

宿善の余命か静かに合掌す

省略の美を貫いて孤老たり

忘れるという有難さわかるかい

明日こそは無欲になろう日暮れどき

川村 好郎

西尾 栞

橘高 薫風

若本 多久志

川柳塔社新役員発表

(順不同)

参事

水粉千翁・小林由多香・浜野奇童・川竹松風・奥谷弘朗・清水一保・宮口笛生・月原宵明・渡辺暁童・弘津柳慶・国弘半休門・小西雄々

常任理事

板尾岳人・高杉鬼遊・河内天笑・川口弘生・黒川紫香・花柳潮花

理事

谷垣史好・笠原吸江・江城修史・神谷凡九郎・有信新之助・植山武助・福浦勝晴・新谷笑痴・藤井一二三・吉岡美房・天正千梢・村上春巳・塩満敏・玉置重人・小野克枝・野田素身郎・嘉数千代香・仲どんたく・藤村ゞ女・植村客遊子・樫谷漫柳・隠岐不酔・原独仙・藤田軒太楼・加藤貞山・松川杜的・山根白屋
現役員同様よろしく願います

川柳塔社

52年度二賞発表句会と

同人総会

川柳塔社主催

日時 昭和52年10月9日(日)午後一時開場

会場 大阪府中小企業文化会館(五階五三号室) (天王寺区上汐町5丁目25番地・地下鉄谷町9丁目下車・南三百

米(電話771・4096)

▼同人総会は午後2時〜3時30分。(同人総会の案内状は出ませんが役員改選等、出席者によって採決させていただきます)

▼式次第―司会・西田柳宏子―開会の辞・川村好郎―挨拶・中島生々庵▽議事①会計報告・若本多久志②役員改選③事業経過報告・西尾栞④質疑応答―閉会の辞・菊沢小松園。

懇親宴 同会場で4時〜5時(会費二千円) 同人以外の方のご出席歓迎。

▼二賞発表句会は5時50分から。

柳話 中島生々庵

兼題 路郎賞・川柳塔賞表彰

兼題 「し」き 高杉 鬼遊選

「朗報」 野村 太茂津選

「番号」 小浜 牧人選

「草分け」 橘高 薫風選

席題 二題と選者は当日発表(各題三句以内)
会費 五百円。

江戸狂歌太平記

東野大八

このほど高橋たか子著「高橋和己の思い出」という新刊本を購入した。一種の衝動買いというべきである。なぜそういうことになったのかというと、この本の腰巻のタイトルに、「高橋文学は本質的に虚無僧の文学である」と大書してあったからである。

高橋和己といえ、ひところ「悲の器」などの一連の著作でブームを呼んだ作家である。私もその二、三冊を読了したわけだが、この作家の女房が、夫婦の生活を通じて、亭主である和己の人となりや、その文学思想を凝視した、いわば楽屋落ちの文学レポートというものがこの本の内容なのである。

しかし、それはそれとして、私の意欲をそそりたてたのは「虚無僧の文学」なるその字句である。そのかみ、私はどこかへの雑文に、江戸時代の雑俳の悪ふざけも度をすぎた

表徳は、虚無僧の編笠姿に似ていると書いたことがあるからだ。虚無僧とは、肩までスッポリ深編笠をかぶり、強くその面態を隠し、一管の尺八を吹奏しながらひょうひょうとさまよい歩く。まさにその名の通りの、虚無そのものの僧形。それは狂句、狂歌をもてあそぶ、知的な連中個々の、実態を憚るカムフラージュのスタイルの様に思えたからだ。

高橋たか子のいう、陰湿な虚無僧スタイルの高橋和己文学とは対蹠的に異なるニュアンスだが、私の彼女のその本への衝動買いは、いわば私が私説の確証を得んがための浪費ということになった。

さて前置きがちと長くなったが、本題の狂歌の講釈を試みるとなると、長大な紙幅を要するので、かいつまんだところで詳細はまた

稿を改めることにする。その意味合いから虚無僧の編笠の中味という本稿になる。

狂歌といえ、そのブームの絶頂期は人も知る天明狂歌である。このブームは天明元年（一七八一）から寛政、享和を経て文化の初めまでの二十四、五年間を指す。

天明三年の「狂歌知足振」によるとその連中の殷盛ぶりは次の通り

（カツコ内はリーダー）

数寄屋連（算木有政） 59人、小石川連（山道高彦） 51人、吉原連（加保茶之成） 16人、堺町連（花道つらね） 24人、芝連（大木戸黒牛） 48人、本町連（大屋裏住） 64人、四方連（峰乃松風） 63人。

また同年刊行の「狂歌師細見」には、唐衣橋州連25人、四方赤良17人、朱楽菅江連50人、元木網連95人、浜辺黒人連25人、恋

川春町連17人、手柄岡持連10人、夷曲庵風斎連18人、棟上高見連18人、萬唐丸連25人、竹杖為輕連24人とあり、この他戯作者三十二人、画工十四人の名を挙げてゐる。これらの作家の職業や身分も参考までに並べておこう。

四方赤良・朱楽菅江・紀定丸・山手白人・葛飾蟹子丸・桃本雛丸・便々館湖鯉鮒等は幕臣。唐衣橋州・山道高彦・古瀬勝雄らは田安藩士。手柄岡持は秋田藩士。恋川春町は駿河小島藩士。堂伴白晝は紀州藩士。小川町住は高松藩士。酒上熟養は名主。つむり光は町役人。大根太木は辻番。浅草市人は質屋。宿屋飯盛・奈方須盛は宿屋。滄州楼金将は銭両替商。浜辺黒人・萬唐丸・霜解道和留は書肆出版業。鳴滝音人の運送業。問屋造酒は酒商人。身軽織輔の煙草入商。二世森羅亭万象は菓子商。鹿都部真顔はしるこ屋。窓村武は八百屋。平秩東作は左宮隠居。芦辺田鶴丸は八咫屋。元木網は湯屋。登和樽は髮結職。腹唐秋人は書家。尻焼猿人・尚左堂俊満は画家。浅黄裏成は骨董鑑定家。橋八衝は歌人。竹杖為輕は蘭学者。桜田つくりは狂言作者。棟上高見・加保茶之成・唐来参和は妓楼主人。花道つらねは俳優。大木戸黒牛は浄瑠璃語り。桜川慈悲成はたいこ持ちの元祖。

活字の文字面が大変黒くなって恐縮だが、詳記したのは身分とその表徳の面白さが興味深いからである。悪ふざけもいところのその表徳こそが、私のいう虚無僧の編笠方式で

士農工商の階級制度も生々しい江戸期とはいえ、表徳の編笠をかぶれば最早万人平等の狂歌人であり得たわけである。彼等はそれぞれの身分・嗜好・交際の味合いに応じて、好みのグループを組み、月次会を娘しんだわけで、今日のロータリークラブやライオンズ・J・Cといったグループ活動を持ったことは明らかで、なかには体制批判のすねもだけのグループも存在していたことは明らかだ。因襲封建的な江戸期の民主平等の快速な集会の本旨を想うと、狂歌・狂句グループこそは、真の民主的な集団であったとも判断できる。明治・大正期の川柳グループの珍竹林とか維想楼とかの、狂歌流の柳亭も帰するところ、狂歌グループのムード再現を試みたまっとうな人間の実性の然らしめるところと納得もできる。天明期狂歌の、いわゆる「天明ぶり」に感応した川柳の狂句志向はこうなること、虚無僧の尺八の「一節切」である。テレビの「鳴門秘帖」の法月弦之丞の持ちものではないが、尺八寸の尺八の一節を切り短くすると、その音色は高く鋭さを増す。このヒトヨ切りの尺八こそが、江戸化政期以後の、川柳の狂句の持味のような気がするのだがどうであらうか。

江戸狂歌の天明ぶりの祖は、狂歌関連史家の説を総括すると、内山椿軒（通称伝蔵、字文郷、または芙蓉楼（天明八年没））で、これが天明狂歌の産みの親とされてゐる。

この椿軒の門下から、後の狂歌三大家と称される小島謙之（唐衣橋州）、太田南歌（四方赤良・蜀山人）、山崎景貫（朱楽菅江）が出現する。これらの系例外に、風来山人、平賀源内がいるが、天明期以前に死去しているので例外。

さて、天明狂歌の虚無僧グループ、民主的ムードのグループ活動と一応は質的にほめてはみたが、実のところ、狂歌人口のブームによる増加と、これに乗る狂歌師の氾濫と派閥間、結局、天明狂歌の凋落に拍車をかけていく結果となる。晩年、朱楽菅江も「故混馬鹿集」でいわく

この頃もはら狂歌を世にもてあそび殊に戯れたる表徳を云い罵るに言葉はさしたるおかしきふし云い出さざりければ
糞船の鼻もちならぬ狂歌も葛西みやげの名ばかりぞよき
菅江は破目はずした天明ぶりの狂歌の氾濫を、糞船とみてコキ下ろしているわけである。こうした狂歌さききに、格好のエピソードがここにある。

江戸を舞台とした天明狂歌は、質的低下は免れなかったが、文化の中頃にはこの天明ぶりは全国に行きわたり、その数は十万というしようけつぶりを示した。しかし、その頃には、天明狂歌のA級指導者は、大半死去したり病中となり、その末期の文化の世には、宿屋飯盛（六樹園）と鹿都部真顔（狂歌堂）の

二線級狂歌師の対立となり、全国の版図を大きく二分した。

対立派人の一方の旗頭は、しるこ屋の真顔で、蜀山人の門下出身。寛政六年に判者ととなり、俗に狂歌堂真顔で通し、門下には四方の歌垣、または俳諧歌場と名乗った。

彼のこの道の指導理念は、狂歌は「古今集」以下の俳諧歌と同じ和歌の一種であるから古来の和歌の精神と文法に則るべしというのである。

当時の純正和歌の信奉者は、狂歌のしようけつぶりを手をやき、狂歌は卑猥皮相、風騷を事とし、その指導者は無学厚顔の痴れものと猛烈にコキ下ろした。この情勢に真顔はいわば迎合して、狂歌師も一流の体面を保とうとしたようだ。

これに真向から反撃したのが、はたご屋の飯盛である。彼は「狂歌百人一首」の序文で、真顔の主張をくそみにコキ下ろして「狂歌とは俗言俗語をもつて、思うがままにつづけ言ふものなれば、雅俗の差別などは片腹痛し」というわけだ。（長文だが端折るとこうな

る）かくて真顔と飯盛は、自説を守って相反目し、ついに絶交の間柄となり、江戸の狂歌界はこのためついにまっ二つに分れる破目となった。これを斯道では、真顔の俳諧歌派、飯盛の純狂歌派と呼んで区別した。

真顔一派は飯盛を敵方とみなし絶好すると

やたらと判者を蓋造し、その判者の点料収入を公然と認めた。この実利の効果はてき面

で、その勢力範囲は全国に波及し
—連なれば蝦夷琉球に釜山海、硫黄島に女
護と韓唐

とその勢偉を大いに自賛した。

これに対し飯盛側は、片腕の奈方須盛と敢斗したが、次第にひっ息、せん方なく京・大坂に名古屋・甲斐・信濃・房総・四国徳島を根城としたが、持前の江戸人の洒落っ気が関西はじめ地方人に通せず落目をかこつ有様。

この両者の対立は、狂歌の凋落ムードをよぶものとみてとつたのが老蜀山人で、両者の仲裁を買つてた。時に文化十四年秋（一八一七）である。この年の「戯作者小伝」に出ているその消息を伝える一節がある。（要約）

中村座大名題「花雪和合太平記」に、故坂東三津五郎と岩井杜若が不和にて、文化八年以降から当年に及びたるが、連中の一方ならぬ図いには和合名題にこぎつけたり。蜀山人これを知りて、真顔・飯盛に使者を出し、何気なく来たりし兩人に、中村座の舞台の様を示し、今日より水魚の交り致すべし、と和睦の盃事をせしめたり。この時の互いの作

—これまでのだんまりの幕引きかえし
—気も相肩のものと棒組

真顔

—膝とひざよい中村の下棧敷二間つづき
—の隔てだになし

飯盛

だがこの兩人、斯道の大御所の蜀山人の顔だけはこの場で立てたものの、その後はもとのもくあみで、十年間の不和が続いた。この挙句の文政十一年京都二条家から、真顔・飯盛に宗匠号を授けとの達しあり、その際「狂歌は不都合である故、俳諧歌とせよ」とあり、これが承服できねば印綬は保留とのただし書がついていた。これには飯盛の出方が注目されたが、飯盛は意外や、あっさりこれを認めた。いふなれば、この一件は真顔側の完全勝利が確立したことになる。

どうもこの印綬問題は、真顔側の一芝居という説が強いが、その後の二人分の在り様が面白い。真顔は印綬宗匠号をうけた後は、下賜された紫の紐の烏帽子・師干・葛袴をつけ門下に臨んだが、これに対し飯盛は、下賜の衣服や印綬の証書は、ひとからげにして押入れにほうり込んだまま、死ぬまで一顧も与えなかったという。

真顔はその翌年、宗匠号に感激しすぎたのか急死、飯盛もその一年後に死んだ。文献によると真顔は微禄な士分の出で、機をみるに敏。これにくらべ飯盛は庶民の出で、町人儒者の風格があったが少々へそ曲りだったとあり、これ以上の身許は一切不明である。とにかくこの兩人の死で、江戸狂歌は急速度で凋落寂寥をきわめ、各地の狂歌界も次第に衰微し、幕末の混沌期へと埋没し去るのである。



青木迷朗

諺風柳多留廿五篇研究

— (十六丁) —

入江 勇・紀内 恒久・鈴木 黄
 清 博美・青木 迷朗・室山 三柳
 八木 敬一・西原 亮・岡田 甫

279 面白い雪見ハ扇つかひなり

入江一吉原八朔の雪見。暑いから扇をつかいながら、八朔白無垢のおいらん道中を見物する。

八月をあつがる所の面白さ

宮一・43

八木一賛。扇屋ないし花扇を効かせているかどうか微妙なところ。

西原一賛。雪と扇という反対のごときものでまとめたのがミソ。

きつとして出る八朔は寒く見へ 一・7
 岡田一「扇」は花扇には関係なく、一般客としていいと思う。

280 神木の寝鳥のさわくおそろしさ

入江一丑の時参りの句。逆上した女が嫉妬した相手を呪い殺す目的で、丑の時(午前二時頃)に参詣する。胸に鏡をつるし、頭にのせた五徳に三本のろうそくをとます。相手に擬した薬人形を神木に五寸釘で打ち込んだ。満願の七日目に、呪われた者は死ぬとされた。

神木へもふくくひ時まいり

三一・34

釘四本丑みつ頃に おきて打ち

三五・21

おそろしい角ハろうそく三本也

四〇・21

室山一賛。謡曲「鉄輪」はその原形。

岡田一同。

281 ひとり娘だとかへつて犬か言イ

入江「犬」は間者。あとをつけさせて娘の素姓をさぐらせると、帰ってきて「あれはひとり娘だ」といった。

八木一賛。

喚ぎに來た犬に鬪を喰らはせる

九五・33

青木一同。「ひとり娘」……婿取りで嫁に迎えるのは困難というのが句の含みか。

女房に犬を付けとく馬鹿亭主

傍五・22

岡田一同。

282 すもゝハやつてきなさつとろとじやすい

入江―妹が下女奉公している江戸の主人に、すももを土産にと持たせた。件のせなあは飲むべえときている。「お前さん、あれは売って飲み代にしなかつたのだから」と邪推して訊ねる。

八木―よく分らない。礎稿でよいのかも知れない。

青木―礎稿賛。上五・中七は「すももはやつてきなかつたんだらうね」と念を押すせなあはの嫌の言。「すももを売って、まさか飲代にしたのではないだらうね」が嫌の邪推。当時すももは栽培されていたのだからか。だとすると、その地方が、主題句の下女の出身地。「きなかつつろ」も方言臭い。

西原―青木説のようなことか。

岡田―まず疑問に対して述べれば、スモモ売りは江戸へも売りに来た。江戸近在にスモモを植えていた農家があつたのである。

ところで、主題句はハッキリしない句。青木氏がいうように「きなかつつろ」は田舎の方言。礎稿の説あたりに解するほかは無いがまだ不安が残る。

213 うぶきたひすゝめを二枚ほどたゝみ

入江―産衣台。お七夜に産衣を一重ずつ重ね

て据えて置く台。置き所がせまくなつて枕許のすずめ形の屏風を二枚ほどたたんだ。

うぶぎだい七夜の客をせまがらせ

八木―そのような場面か。

すずめ形うぶ着の礼に一ツ折

三・34

岡田―同。

214 大根か出たて盗人かぶじまひ

入江―「徒然草」第六十八段。大根が万病の妙薬ということで、毎朝二本ずつ食べていた男が、ある日突然盗人に襲われた。そこへ思いがけなくも二人の武士が現われ追返してしまった。聞けば二人は、あなたが毎朝召上つて下さつた大根だという。「かぶじまひ」はせつかくのことが駄目になることの意味。

盗人を大根からい目に合はせ

二・31

西原―大根と蕪の縁語仕立も。

岡田―礎稿プラス西原説に賛。

215 難の膳米屋の隣さてこまり

入江―米を搗くひびきで難が踊る。

紀内―賛。同趣向の落語に「搗屋幸兵衛」がある。

室山―同。先妻の位牌が毎朝後向きになっているという怪談の犯人は、早朝からの隣家の米屋の搗く響であつたとか。

岡田―賛。

216 歌かるたかいてとつてハしらすなり

入江―札をこするようにつけては「ハイ、アリマシタ」と知らせる。「かいて取る」は表面をひつかくような手さばき。

八木―自分の爪で人の手を引つ掻いてカルタを強引に取つて相手を焦らす（いらいらさせ）と解しては。

紀内―「しらす」は「焦らす」に賛。嫁が余り見事にサツサツとひつかくような手つきで取つてしまうので、取れない下女、乳母などをいらいらさせている光景であろう。

青木―同。紀内氏説適。「かいてとる」は、右手三指ないし四指にて自分の膝元へ電光石火、引き寄せるという事なのだろう。じらされる者は下女、乳母の外に小姑・姑もまじるか。嫁、掻いて取る数、熊手で掻き集めるが如し。

岡田―同。



52年度路郎賞受賞作

生き方の違いを

敵のようにつつ

竹原市下野町上条二五八一

森井菁居

略歴

昭和三十四年十二月「たけはら川柳会」に入会。四十五年一月故清水白柳、山内静水両氏の推薦により川柳塔社同人となる。この春、第一回日川協全国大会で準大賞を受賞。

住所 広島県竹原市下野町上条二五八八の
一
年令 三十九才。
職業 郵政省簡易保険セールスマン。

52年度路郎賞・川柳塔賞

受賞作決定

中島生々庵

52年度路郎賞、川柳塔賞の二賞決定のため
の最終詮衡委員会が9月2日夜開かれた。

六名の詮衡委員が数カ月を亘って慎重に詮衡、そのなみなみならぬ心労が結集されての候補作品が無記名清記され委員長の手許に提出される。それから暫らく緊張した時間が息つまったまま秒をきざむのである。毎年殆ど同様であるがこの緊張の時間こそ「川柳塔」のいぶきというものを痛切に感受する尊い時間である。委員長がそれでは発表しますと入選句準優秀作第一席、第二席のチェックした句箋を編集部に渡す。その瞬間、形容の出来

ないドヨメキに似たものが一座に拡がる。そして言葉にこそ出さないが、受賞者のますますご精進とご健康をこころから祈る気持ちがあふれる。荣誉も大であるが責任も重い。受賞者に祝福あれ。

52年度路郎賞入選句

生き方の違いを敵のようにつつ

竹原市 森井菁居

人生の世渡りをはつきり捕えて居て、エゴに似てエゴではない。結局男一匹の姿であらう。作者の進歩ぶりが近來特に著しいのを感じる私は一入ご健吟を祈る一人である。

準優秀作 第一席

女三人ふつと話題の無いこわさ

和歌山市 垂井千寿子

女性が書いた女の句。下五が力強い支えになって風格を崩さず見事に整った句である。

同 第二席

春めぐる母なる匂い蓬摘む

倉敷市 水粉千翁

母と子の会話も聞こえるし蓬の匂い迄が夕臍にただよう。温い抱擁力が拡がってゆく。

路郎賞候補作品

(到着順)

若本多久志

秀句

春めぐる母なる匂い蓬摘む

水粉 千翁

準秀句・第一席

勝馬の淋しい顔を見てしまい

小野 克枝

同・第二席

燃えて落つ夕陽に未練の朱が残る

岩田美代

佳句

一期一会みな邯鄲の夢なりし

和田維久子

移り香に男の罪が匂うなり

小浜 牧人

叱らない父へ黙って酒を酌ぐ

月原 宵明

木の葉さえ人の心にふれて散る

鈴木かつ子

思い出のぬくみ小出しに抱いて寝る

八木 千代

あきらめてから一点がよく見える

藤井明朗

金に縁なかつた父の骨白し

中村ゆきを

秀句評

ほのぼのとした大地の温みを感じさせる句。

☆

川村好郎

推撰句

小さくちいさく夫婦円を描き直す

河野 君子

鎖からはずせば一個の小さな輪

川端 柳子

一つだけ鳴る鈴がある母子家庭

小浜 牧人

分け合えるとき貧しさがあたたかい

庶民絶叫符は風にさえぎられ

水粉 千翁

フト見れば私の表札いがんでた

嘉数千代香

にぎり水生きねばならぬ糧と知り

岩本雀踊子

無から有 明日のロマンの貢くる

高橋夕花

☆

☆

新調の靴定年を蹴り返す

和田維久子

ぬくい日も冷たい日もあり二人の手

八木 千代

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

正本水客

推薦句

女三人ふつと話題の無いこわさ

垂井千寿子

準推薦

川枯れて貧しきものを見てしまう

小島蘭幸

準推薦

鐘の音の消えるところは暮れている

村上 春巳

黙つてる母が一番たのしそ

和田維久子

片つばの目を閉じておく善もある

高橋 夕花

生き方の違いを敵のように言う

森井 善居

しんがりに父が帰って今日がすむ

本多清人

肩籠の位置まで腹が立ってくる

谷垣 史好

重宝なことは無かつたことにする

重宝なことは無かつたことにする

真実を告げる言葉を選っている

河原みのる

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

☆

橋高薫風

恋終るつくつくぼうし鳴っていた

小島 蘭幸

右の町左の村の一河の情

鈴木村颯子

きりぎりす胡瓜の色で死んでいる

工藤甲吉

札束を固い握手と錯覚し

遠山 可住

鐘の音の消えるところは暮れている

村上 春巳

ひと一人庇えばぬれる女傘

高橋 夕花

花吹雪こんな住生出来るなら

西出 一栄

人生をお悟りやすと大文字

山川 阿茶

準推薦句

化粧する鏡の奥に急な坂

河野 君子

推薦句

沛然と雨人間を一人にす

遠山 可住

〔評〕推薦句は、映画羅生門や恐怖の報酬

のプロローグを思わせる作品だ。沛然と降り

出した雨に鶏などが尻を振って逃げ去ったあ

と、人間は軒先で一人になる。ここから様々

のドラマが繰り広げられる。そして、この光

景は又、沛然と降る雨を介在させて、人間本

来の孤独を味あわせる手法は、川柳として斬

新だ。

準推薦句は、中七、下五が実に効果的で、危機感と云うか、焦燥感と云うか、ある破綻に直面した女性の心理の綾が明確に写し出されている。この作品も、内容表現共に新鮮で申し分がない。

今回は、路郎賞に推すにふさわしい風格のある作品が多かったが、私は、やはり、多少なりとも新しい傾向の作品を選ぶ結果になった。

☆

西尾 葉

特選

生き方の違いを敵のように言う

森井 菁居

準特選

女三人ふつと話題の無いこわき

垂井千寿子

準特選

日記書く少女に山の父がある

板尾 岳人

揚雲雀制空権を主張する

塩満 敏

吊革を両手で握り夏に耐え

野田素身郎

指先の欲が残っている動き

堀江 正朗

初対面から善人の酌きこぼし

河村 日満

人間万歳人間らしいミスをする

神谷凡九郎

一番に日の丸を出す無職なり

西森 花村

居直った私を私ももて余し

三宅 不朽

春うらら地球大きくなったよう 西出 一栄
大自然の中でキャンプに閉じこもり 中川 晃男

☆

菊沢小松園

推薦

子に渡す地図に矢印などはない 小浜 牧人

準

恐ろしいもの一つに無関心 小島 蘭幸
その辺のところが男にのみ込めず 野坂つき子
風が吹いても雪が降っても愛になる 小出 智子

化粧する鏡の奥に急な坂 河野 君子

生き方の違いを敵のように言う 森井 菁居

バラ色でない人世は口にせず 若柳 潮花

そのままで散りたいだろうカンナの朱 三宅 不朽

シーツは無言で物干竿にゆれ 原田 明春

武器捨てた日から女の一人旅 黒田 真砂

受賞のよろこび

森井 菁居

一三夫氏から速達で連絡を受けたのは、奇しくも第二十回近真大会の日だった。私には受付で筆を走らせていた。父からの電話

に半信半疑の返事を繰返すばかり……。『文面をよう見てみんさいや』、「確かじやわい、生き方……の句が路郎賞に決まった言うて書いてある」。それを実感として受けとめたのは、小松園氏の「おめでとう」の肉声であった。この感激を肝に銘じ、ファミリーで川柳を追い続けたいと思う。みなさん有難う。

二賞選考余聞

19行あいだったので、編集部から選考当夜の模様をご報告申し上げよう。(地方の二、三の方から、どのようにして選考するのか、毎年このアナウメントでよく分かった、というお知らせをいただくので。)

各選考委員から推選句の原稿を一三夫が受取り、その最優秀作だけを無記名で各選考委員にわたす。そしてそこで検討するわけである。この日は常任理事の出席もよく、あいまいなことは許されないわけだ。

川柳塔賞の方は数が少ないので、わりとすんなり決まるが、路郎賞の方はさすがに熱気がはらむ。路郎賞は無記名の句箋から主幹が選出する。そこで主幹苦心の当選作発表になるのである。一喜一憂の瞬間である。

個人的にいえば今年は河野君子さんがよい仕事をしたので、いいところまで行くのではないかと、期待していたが……。(F)



52年度川柳塔受賞作

咲いて散る ただ

それだけの世に疲れ

和歌山市美園町一

西山 幸

略 歴

昭和五十年三月朝日新聞へはじめて抄句、野村太茂津先生から御指導を受け、六月、川柳わかやまに入会。併せて、和歌山七面句会で、西尾〇先生の御指導を受け今日に至る。

咲いて散るただそれだけの世に疲れ

西山 幸

川柳塔賞受賞作
咲いて散る ただ

それだけの世に疲れ

和歌山市

西山

幸

☆

戸田古方

小浜牧人

準優秀作 第一席

和歌山市

西山

幸

☆

川柳塔賞

ほろほろの心を洗う旅に出る

納 史葉

ほろほろの心を

和歌山市

西山

幸

準川柳塔賞

車椅子の子に青空が広がった

牛尾 緑楼

洗う旅に出る

八尾市

納

史葉

子と同じ目の位置ならば賭けようか

谷岡 芳枝

準川柳塔賞

紫の炎と見たり舞扇

今谷 紫園

準優秀作 第二席

和歌山市

西山

幸

落書を感じてる寺男

飯塚 虎秋

一步前進ペースは遅々としていても

渡辺 南奉

善人のその日

和歌山市

西山

幸

華も葉も根も役立てて蓮は生き

田口 虹汀

快心の仕事を終えた手を洗う

紫田恵美子

その日を音たてず

名古屋市

大林曲ん手

陽へ土へ詫びて大樹は枯れて行く

岩下照沖 候補作品

未練かな元の形のままの灰

園部 正則

禁酒して腹の底まで冬になる
聴えないから一心に毛糸編む

松井 俊風
北野 久子

☆

大坂形水

真つ白に書いては雪の画にならず

岸本豊平次

通り雨誰にも云わないことにする

時末 一灯

風に聞く噂は風の中に棄て

文川 野生

日雇バス一人一人をつまみ入れ

高崎 雀声

地獄絵をかいて自分でうなされる

安藤寿美子

傍観者になりきつている置時計

西山 幸

静けさは父と母とがもめている

那須 鎮彦

準二席

ぐるぐると廻る矢印だつてある

高橋 古啓

準一席

平社員の机はどこにでも置ける

西本 保夫

候補作品

笑い声小さな家からころげ出る

江口 度

〔評〕

戸田 古方

度

何んでもない句です。だが噛みしめて読めば読むほど味がある「咲いて散る」人生はそれこそ、それだけなのに、人は喜怒哀楽のドラマをしようこりもなく繰り返している。頭の下る句として推薦する。

咲いて散るただそれだけの世に疲れ

一分間の柳論

NHKラジオ放送、土曜日の『老後を楽しく』のテーマの中で、川柳を聞いています。新鮮味のある選句を聞いて、一人はは笑むことがあります。

平均寿命が延びた今日、考齡の柳人も多くなり、一般に興味として老人の川柳に対する関心も高まりつつあるようです。近頃川柳のような俳句、俳句のような川柳、詩川柳、或は革新川柳等、大げさに言ふならば短詩文芸の混乱しそうな中で、それぞれ御意見を主張されています。尤

草深醉升

もと思ふことも多いのですが、私には容易に理解し難い句も多くなりました。自分の不勉強を反省して繰り返し読んで、解明と鑑賞につとめることにしていますが、私は私なりに『川柳は人間陶冶の詩である』と言う師の教えを、心の底にとどめて、出来るだけ新しい時代に相応しい句を作るように心がけて、牛歩乍ら精進を続け、老後を楽しんで川柳で過ごしたいものと思っております。

感激

西山 幸

太茂津先生から、お電話を頂き、信じられない朗報に、未だ実感が湧きません。優しく、厳しく、辛抱強く御指導下さっている太茂津先生はじめ、諸先生方に心から、お礼申し上げます。

川柳のむつかしさ、視野の狭さを、思い知る今日この頃の私に、何よりの励ましを頂き、本当に嬉しう御座居ます。亦新しい出発点に佇って、初心に還り一歩ずつ、進みたいと願っております。

幸さんおめでとう

川柳塔賞を勝ち得た西山幸（みゆき）さんは、川柳をはじめてまだ二年半たらずだそうである。しかし、これまでに短詩型のなにかをやっておられたかも知れない。いずれにしても努力家であろう。

ぼくはいつも云うのだが、川柳は三年もやればみんな五分である。二十年生が怠けていると勉強家の三年生に食われてしまう。こんな例は句会でハッキリ答えを出しているのだ。多少なりとも高橋夕花さんにアドバイスしてきたぼくが、現在彼女を追う立場になっている。

(F)

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

工藤 甲吉

おぼはんと呼んだばかりに酌ぎに来ず

宮川 珠笑

巻頭の一句目だからというワケではないが確かにいい句だ。なんの銜いも修飾もなく事実をありのまま、さらりと詠んだところにこの句のいのちがある。大体、軽妙なタツチの句には、噛めば噛むほど深い味のあるものが多く師・路郎の句集「旅人」の中にも数多く見るところ。川柳からこのような句は将来とも絶やしたくないものと痛感する。

のら犬の瞳が澄んでいる奈落

香川 酔々

犬を人間に考えてみた。人間、色欲や物欲、金欲に狂奔しているときの瞳はとかく不浄。それが一転、どん底に落ち、愚悪、凡痴に気づくと、瞳もやっと清浄をとり戻し、その人は初めて救われるのではないか。いい弔詞でしたと涙を拭きなおいし。

小西 雄々

この句の後に「飾られた言葉寂しく聞いている—安藤寿美子」があった。寿美子さんの句は弔詞とは思えないが、とに角、いい弔詞というのはそんなにないもののように、私も特にこれはと感嘆した弔詞には二、三度出あっただけである。やはりいい弔詞はその人の人物や生活を正しく深く知らないと出来ぬものらしい。句もまた寿美子さんの「飾られた言葉」だけでは寂しいだけである。

鉛筆のにおい尋常高等小学校

村上 春巳

ノスタルジア。削る時にほかに鼻をつく木の香。その頃の「肥後守」というナイフも忘れぬもの一つ。明治、大正と戦派前を思わずウーンと唸らせる佳句である。この顔はひとりに見せる水鏡

和田維久子

典雅な句である。今日に於ける愛や情熱とは異なるものだ。大袈裟なようだが「源氏物語」などに出てくる女性を連想させられたポーナスのニュース無職をひがませる

室谷 徹舟

定年退社後自分も体験したことだが、富者も餓鬼、貧者も餓鬼と教わってからはなんともなくなった。ただ不況などで吹く風と国民の血税によるポーナスをイの一番にせしめる役人にはやはり抵抗を感じる。

お隣りのボヤも知らずに他所で酔い

両川 洋々

私の友人にも同じことがあった。あとで奥

さんに散々油をしぼられ、グウの音も出なかつた友人だった。今はあの世で苦笑?。親バカと知っていながらバカとなる

高橋 操子

私は孫バカで知られたが、親バカの方はそれほどでもなかった。今日の場合、世相が世相だけに親バカも程々にすべきではないか。招かれて来たのに犬に吠えられる

野田素身郎

忠実な番犬を叱り、平身低頭お客さんを出迎える誠実なこの家の主人の姿が目には浮かんで思わず微笑ましくなる。ただ、犬はそれならそれとなぜ先に言ってくれぬかと仏頂面。

浅学非才本当のことを言うただけ

川村 映輝

浅学非才はふつう自己謙称だが、昨今はこの句の通り、本当も珍しくない。これも物・金・コネの時代の為か。ただ浅学非才の自分をハッキリ本当であると、人前に宣明したとなるとこの人は実に偉い人だ。つながれた小舟のんきに日向ぼこ

山川 阿茶

200海里騒ぎとは別に、小さな漁村の浜辺でよく見かける風景だ。この句、読んでいううちにだんだん眠気を催してくる。巢造りへつばめ必死のゆきかえり

榎原 秀子

生きとし生けるものの為す尊い業。やがてこの巢では雛がかえり夫婦燕はまたまた必死にこれを育くむ。現代の人間の中にこの燕を見習う必要のある人が居ないかどうか?。



菊沢小松園選

松江市 梅本登美也

生きて行く重み支える指のたこ

柏原市 小谷葉子

再会の胸にかすかな灯がともる
その中の金のないのがよくもてる
消しゴムに再度奮起をうながされ
今日からは貴男と呼べる大社発
取りあえずシャワーで表面だけ流し

三重県 川上富子

裏方におくる拍手は透きとおり
遅咲きの花は表情変えて咲き
たんたんと語る別れを秘めている
お茶だけですむ友のあり20年
さわやかな思い出 恋の周波数

海門市 牛尾緑楼

肩書があつて女よく喋る
燃え尽きた火花を武骨な足が踏む
人様の不幸へしつけ糸を取る
合鍵のひとつの錆に気がつかず
まつ先にあきらめた子に養われ

八尾市 納史葉

夕焼けに向つて帰る共稼ぎ
初盆に色香残して未亡人
新築の祝い借金には触れず
ままならぬ時もあるさと石を蹴る

寝屋川市 柴田恵美子

一族の矢が私に降つて来る
わたくしに進軍ラッパ吹く私
すこうしの優しさ下さい私に
くちなしの白は心に響く色

菌に衣させぬオバハンへ笑つとく
わたしなら赦す夾竹桃の罪
告白をする気になつた旅の宿

なまぐさい愛なら涙など出ない

寝屋川市 江口 度

バーゲンのステテコ隣もはいている

母の味電子レンジが消していく

不発弾軽い冗談かも知れぬ

酒好きの奥さんがいてうまが合い

熊本市 有働 芳仙

自殺して一回切りの記事になり

結婚は友には勧めぬやつれよう

妻とのむ酒の話は世帯じみ

夫唱婦随ちよいちよい夫の足を踏む

大和高田市 岸 本 豊平次

選挙ポスター国を憂うる顔でなし

飛鳥美人立たせてみだし曼珠沙華

外からは何処も平和な灯がこぼれ

薬剤で枯れたは秋の色でなし

松原市 北野 久子

演技とは知らず夫慌てたり

苛立ちは追う蠅にさえからかわれ

反抗もいもの夫ふとんを敷いてくれ

落着きましたよ全蠱になりました

和歌山市 松原 寿子

振り向かぬ視野へ枯葉を積む旅か

首たてに振つてきれいな嘘に酔い

一筋の掟へ慕情消し切れず

背の温み追えば女になつてゐる

吹田市 藤原 世史春

有珠山の沈黙誰が保証する

田も畑も埋めて有珠山おさまらず

こんなにも有珠山恐い山になり

天然は化学に勝る味噌を売り

私の日記 あなたが占領し

私に似ている人でふり向かず

私の日記 あなたが占領し

娘を叱るあまりに私にそつくりで

岡山県 長尾 保

美しい虹デッサンは出来ている

旅つづく金魚の餌が気にかかり

七面鳥のような女の酌を受け

金が要りいつか持病も見失い

東の間の祈りでしめる原爆忌

四季の花妻にもんべのある限り

島根県 飯塚 虎秋

それなりの長所を一つ見つけ出し

やがて来る赤ざの杖に頼る時

秋の風不況の風と手をつなぎ

大阪市 北 勝美

平社員として人格は持ちつつげ

平社員不満は肩籠だけが知り

樞原市 西本 保夫

詔勅の通りに平社員たえしのぶ

西宮市 杉 浦 婦美子

砂浜に狂える夜を埋めて去り

友情がすこし批判を曲げている

客をみな社長に仕立て稼ぐ顔

唐津市 山下 勝 一

常識の前を感情突つぱしり

アドバリン上げてる程に売れもせず

夫婦仲悪い夫婦の子沢山

出雲市 石 倉 英佐子

恍惚に夜光時計は光らない

ガラス箱出れば居場所のないわたし

黄金虫起こしてやらぬ人間性

高松市 溝 淵 美紀子

貴婦人になつたつもり сауナ風呂

当然の事でこんなに喜ばれ

蜘蛛の糸腕げばかりみつく仕掛け

大阪市 堀 口 欣 一

ふるさとのいしぶみに見る山女魚の匂

朝顔が咲いて八月十五日

よく見れば造花なりけり萩桔梗

岡山市 船 越 汽 水

靴下を履きなおしてる電話なり

欺すのも辛いことだと語る通夜

ピラを拒否すこし依固地になりながら

和歌山市 西 山 幸

冗談が冴えて訣れを辛くする
想い出の中から秋になつて行く
生きのびる罪はなに色彼岸花

倉敷市 斎 藤 通 風

詰腹を切らされ後で慰安会
達筆と言われる読めぬ手紙受け
天文は食はずししない星の数

東大阪市 崎 山 美 子

もう夢は捨てていますと言う未練
この辺が幸せなのだと言いつ聞かせ
都市砂漠善意の花で埋める夢

豊中市 出 口 セツ子

人の世の虚しさ花火の煙あと
手作りのブローチ重し愛終る
捨て犬と心通わす不信の日

寝屋川市 小 林 鯛 牙 子

白い風白薔薇に触れてきた風
櫓借り太鼓も借つて団地の盆踊り
立志伝の書き出し裸一貫から

米子市 佐 伯 越 子

血まみれの歴史を踏んで城を出る
ふり返り吾が生きざまをたしかめる

息抜きの旅へ手形がつきまとい
尼崎市 中 谷 利 美

悪筆で私有地につき通せんぼ

青森県 波 ただお

扇風機三時頃より熱を出し
辛抱の女のいくさも終盤へ

寝屋川市 福 富 隆 子

カナツチに見えぬ浜辺の記念写真
夕餉にも波紋がおよぶ二百カイル

島根県 岩 田 三 和

親切のクーラー長居に涼しすぎ
水着買う娘は人魚になつている

鳥取市 岸 本 無 人

苦勞から逃げて安楽椅子はない
体育は片足あげてずつと立ち

岡山市 柳 原 孝 柳

同窓会禿と白髪が笑い合い
スポーツをするにも車で行き帰り

岡山市 清 水 金 太 郎

水差しに酒のにおいをする患者
かた言の英語も出てくる喜寿の父

尾鷲市 渡 辺 伊 津 志

体重の減つた時だけキロを言う
子どもより親が決めてる志望校

泉佐野市 楠 畑 正 子

またたきをせぬ仏像にある笑顔
腹立てていたので瓦斯も点火せず

大阪市 新 川 貞 祐

二人だけのチャンス逃がしてそれつきり
一寸したはずみ猫のポルノ見た

羽咋市 三 宅 ろ 亭

増え過ぎる子供と米に手当て出し
気狂いにもならず自殺もせず喜寿

大阪市 平 井 露 芳

農を継ぐ子もいず米価気にならず
車椅子入日本議事堂あわてさせ

山口県 高 崎 雀 声

クーラーの外で風鈴風を待ち
造波プール大海知らぬ子ははしやぎ

羽曳野市 岩 橋 双 虎

孫の知恵菓子屋の方へ引つばられ
手習いもせずに悪筆親のせいにする

大阪市 中 辻 千 子

幸せはまだ迎え火をたく身なり
月曜の朝磨かれた靴が待ち

唐津市 桑 原 掏 治

押して出るポットのような祝辞きく
芸術をちまたで見せる始細工

岡山市 砂 田 静 佳

健康の一部を犬と共にする

六十も自分が超えれば老でなし

大阪市 欄 蘭

物価高生きる明日を手探りし
報告に帰る蟻の歩巾は速くなり

岸和田市 池田 香珠夫

やや沈む睡蓮の葉に雨蛙
針金をからめ奇型にするさつき

泉佐野市 大工 静子

総入歯にトウモロコシのさも似て
街路樹の下 腰延ばす乳母車

富田林市 中村 優

円周をくるくる回る顔の皺
夢のない貴方へ上げるシャボン玉

香川県 田井 教之

命日に亡父より老いた子らばかり
つまずいた手を握りあい婚約す

宇部市 樋村 天流

蒸す夜の水替えてやる金魚鉢
シャッターの僕へ媚びてる花と蝶

羽曳野市 麻野 幽玄

良しとした嘘が寝れぬ夜にする
思索の中へ溶けて行く星座

出雲市 板垣 夢酔

趣味の会 会則にない恋を知り
子が面倒みないプランも遅くない

大阪市 三宅 憲司

クサリ場で靴の底にも目が欲しい

児はまだかの便りに避妊とは言えず
鳥取県 加藤 茶人

愛想の悪い職人腕が立ち
豊中市 田中 善四郎

港の灯詩情消えたり生れたり
松江市 岡崎 雪美

へそ曲り今日は何も言わぬ酒
大阪市 野田 君枝

うまれたらどうする無策の猫を飼う
長崎県 岩崎 和子

義理人情に弱い男の靴がちび
東予市 小山 悠泉

嘘を待つ女へ白状して別れ
滋賀県 柚木 踏草

世渡りが上手で金に縁がなし
鳥取県 金川 満春

墓掃除疝性やみの父なりし
尼崎市 中塚 喜甲

インスタント妻に多忙な日が続き
岡山県 池田 半仙

海が好き山が好きとて夏に入る
唐津市 岩崎 実

出演者放送前によく喋べり
唐津市 三浦 ひろ坊

唐津市 筒井 朴龍

翁面皴が今昔物語り

童謡と軍歌二次会まだ続く

曲り角鯛の尾鰭がよく動き

墓にくればけつばれと亡父の声がする

海水に浸る勇気が失せた輪

原爆忌戦い知らぬ子ら叫び

洗濯を鞆いづばい帰省の子

無視されたように返信来ぬ焦り

原点にかえりたいけどもう遅い

相談を掛けたい人の手があかず

自動ドア汗ふく客とはつゆ知らず

誰でもが自分のメロディ持っている

さわやかな別れもあつた白い雲

唐津市 桧垣岩光

唐津市 田口虹汀

八戸市 島田昭治

東大阪市 加藤千代子

羽島市 伊藤静枝

岸和田市 清野こう

岡山市 井上柳五郎

鳥取県 広富白峰

橋本市 森脇善彦

出雲市 高見鐘堂

今治市 園部正則

島根県 松本文子

濁らせる語尾原点に帰らせる

★

八戸市 小泉紫峰

上田市 金子呑風

道中の酒を楽しむ鈍行車

梅酒なら委せといてと女房言う

値切つる指そろばんの珠に触れ

値切るだけ値切り翌日顔を出し

その嘘を言わぬ先から覗かれる

大洲市 米沢暁明

玉三郎かつらと知つていて女

かつらいろいろ女バッグに入れて発ち

そういえば末つ子らしい顔という

岐阜市 市川鱗魚

定年退職神通力も消えて行く

満足は心を空にしてしまう

叱られる時の哀れなモーニング

標準語きれいな嘘を作り出す

人をうたがういささかきつい度のめがね

第一回 寝屋川文化祭市民川柳大会

▼52年11月6日(日) 正午開場▼会場―寝屋川市総合センター
四階(寝屋川市池田西町二八)▼題と選者「丘」住田英比古
「川」大坂形水「魅力」橋高薫風「屋根」菊沢小松園「発展」磯野いさむ▼詳細次号▲

生駒から

麻生 葭乃

—西尾葉あて—

拙宅窓外の大赫色の空地はいまだに家も建

たず、右手の山上から朝日が昇る頃には、空地はほのかにあげそめす。丁度四時すぎです、二羽の紋白蝶がもつれ合つて飛んで来たかと思うと、一羽は真赤なばらの上にとまつて蜜を吸い出しました。あとの一羽は夏草の上にとまつて別の蝶々をつれて何処かえとんで行きました。ひらひらと戯れ遊ぶ蝶々はみんな番（つがい）かと思つていたらどうもそうではなさそうです。

やがて、親子づれの雀が餌を探しに来ました。つばめも舞い降りて来ました。犬も来ました。猫も来ました子供も来ました。生物の営みがこうして朝から晩まで展開されてゆくのです。飽きもせず眺めているのもなかなか

か根気の要る仕事です。

仲睦いことを鶯鶯のちぎり浅からずと云いますが、或る動物園長のお話では、おしどり位浮気な鳥はないそうです。雌をつれて水に浮いてるかと思えば、又別の雌のそばへ行く、又別の雌のそばへへばりつくという風にアベックの相手は変りどうしなんです。

○ 蟻はゴムの匂いがきらいだそうです。私は網戸の前の溝へゴムを輪に結んで並べています。ひま人の私にはこんな仕事より外にないのです。

○ 白内障の進行を防ぐためにはレコードカウジをきいているより仕方がないのです。此

の頃はテレビもなるべく見ないようにしています。英国や米国の現代作家は一体何を考え何をどう観察しているか、どう云う風に自然を修飾しているのだろうか、いくら好奇心をもやしても、視力が私の全財産となれば、止むなく手控えねばならぬことになり勝ちで年齢を重ねると云うことは竹の皮を剥ぐように、欲望をひとつずつ脱ぎ捨てて行くことになるのです。地球の外へ滑り落ちぞこのうていまだにうろちよろしうして身の上ですから、余儀なく宿世の因縁とあきらめているので、「可哀そうなのは此子でござい」と千日前あたりの見世もの小屋へ出してもらいましょうか。

○ 喜怒哀楽色に表わさず」とか「切目正しからざれば食わず」とか云う儒教の精神は江戸時代から蔓延していたようです。男は涙を飲んで苦痛に耐えると云う気概を持っていました。肚のうちを人に見すかされると云う油断もありませんでした。こういう社会情勢の中で培われて来た義理人情は本能的衝動にぶつつかって様々な人間模様を画き、劇中人物の心理描写を豊かにしました。英国やアメリカの現代作家のものと比較しますと、まるで反

対です。すべてが開放的です。泣きたい時はあたりかまわず大声をあげて泣きます。日本人はきまりがわるいと云う気がさきに立ちます。空いばりの日本人は内兜を見すかされることが大嫌いなんです。沈黙は銀より尊しと云って多弁をきらいます。こういうところが彼我の相違でしょうが。日本人のようにおと

麻生路郎選

評釋
古川柳の味

八木摩太郎清記

折れたかと思へば起きる筏さし

谷川の流れに身をまかせた筏さし、からだが真つ二つに折れたのかと思うと、そうではなくて次の瞬間にはサツと起き上った。筏さしの情景が躍如としている。

男の子裸にするとかまらず

裸にすると男の子はキャツキャツと云つてよろこぶ、もう風邪をひくと云つてもいつか

なくしていたら存在をみとめてくれる人がないようにあります。色々まなばねばならぬことは沢山にあります。

江戸時代でなくても私の娘時代には暖簾を大切に商人が沢山大阪にいました。損をしても味はおとさない、自家の商品に誇りを持った気骨ある商人がいたので。土曜、

な聞こうとしない。つかまえようとするつもりとその手から抜ける。

親の闇只友達が友達か

親というものは、有難いものだ。自分の子が悪所通いをして、自分の子を悪く思いたくないのだ。うちの子に限って、と思つている。友達がわるいのだと思つている。この親心、母親の慈悲。

押へれば芒はなせばきりぎりす

オヤ、きりぎりすはもうその手から姿を消して押えたのは芒だった。なんだ芒かと思つて芒を放したらパツときりぎりすが飛んだ。秋の野辺を巧みに描写した句だ。

大社立間を見て見たいと云

出雲の大社は俗にいう縁結びの神様だ。誰

日曜は近頃戎ばし通りの人通りは立錫の余地なきありきですが昔は人通りもちらほらでおすし屋の店からあま酔っぱい匂いや甘い椎茸の匂いがして来て芝居見物の気分をそそります。

―はし筋は春の匂いのこうこ巻き 豆秋の句を思い出しました。

と誰と縁組みをさせようと神様が談しているのを立ち聞きして見たいと云つたので、なかなか面白い句だ。時々変な番組があるが、これは出雲の神様の悪戯かも知れない。

大三十日世間へ義理で暮を休み

隠居の気楽さは降つても照つても三百六十四日、ばかりばかりと打ち続けて来た暮も、大三十日ばかりは流石に世間への義理で石を片づけたと云うのである。

大三十日首でも取つて来る気也

大三十日にはつきりお支払いますと云つたがそんな堅いことをいう人間に限つてかえつてあぶない。が、こちらにも大三十日には支払わねばならぬのだから、是が非でも取つて来ねばという掛け取の懸命さがあらわれた句だ。

(つづく)

愛染帖

橘高薫風選

蟻すこしゆとりを持てば好きになる
紅を塗る花のむくろになる日まで

大阪市 小出 智子

たとえば川を木の葉で下ってゆくような
傷ついた日も小鳥屋の小鳥たち

和歌山市 津田 与史

自画像に高い定価をつけてみる
時計屋の時計が語るサスペンス

倉敷市 藤川 良子

この自負を追い抜いてゆく草の丈
樹の下で拘りのない葬送る

大阪市 川口 弘生

瘦せても白髪はもたぬ影法師
着ぶくれは秘め事にして影法師

京都市 松川 杜的

別れぎわのあっけなき父と子の
舟屋にて 燭台の曲線太夫の肩に似て

島根県 堀江 正朗

胃を切つて肝つ玉まで小さくなり
ひま人と言われてもよし窓の風

和歌山市 西山 幸

絹糸の冷えた奢りをもてあます
いくつかの錠に朽ちるしつけ糸

藤井寺市 西 いわを

金魚鉢一人暮しの気安さよ
折鶴の羽ばたきを見る枕元

大阪市 有信新之助

無気力な胴に影の深い貌
海獣論争最中の夫婦喧嘩

大阪市 有信新之助

伊丹市 樫谷 漫柳

豊満なバスト腕組みなどしない
先生の酔い人問らしい顔にする
寝屋川市 宮尾あいき

燃えたぎる太陽人間熱帯魚
豊中市 戸田 古方

兵隊が汗を流した道やそな
農家みなサッシにレースよう揃い
和歌山市 若宮 武雄

シャボン玉屋根の高さが夢の涯て
孤り居て月下美人の白こむし
八尾市 宮西 弥生

逢えるかもしれない時を待つ火花
帯しめる才女の今日にだまされる
米子市 石垣 花子

三才児才媛の祖母たじろがせ
鍵っ子の余得漫画も気兼ねなく
岡山県 白岩 文衛

千羽鶴授業の隙に一つ折り
教頭の今日は生徒に叱られる
柏原市 大峠 可動

善人も悪人も微笑は輝けり
こは病室主よ微笑を下さ
島根県 堀江 芳子

身に痛い言葉はときを経て育ち
玄関にちっちゃな孫の靴揃え
柏原市 小谷 葉子

忠実な父の匂いの白いハンカチ
橋の名も知らずに通る淡い夢

東尾市 高橋 夕花

倉敷市 水粉 千翁

島根県 小砂 白汀

鳥取市 河村 日満

鳥取市 山根 白星

原爆忌雲の果てよりナレーション
遠い日の暮色鐘楼ありしかな

人は死す船が港を出る如く
八尾市 大路 美幸

蜘蛛しぐれ蜘蛛あくまでも無言なり

そのかみの虚勢が呻る大ジョッキ
風入れて言葉すくなき老夫婦

出土せり数千年の拷問や
和歌山市 野村太茂津

想うまい憶うまいとビールが嘔き上げて

浄らかに死にたし揮干しながら
揮を真っ白に干している老兵

葎ゆれる風に万感よみがえる
蟬時雨しばらく過去へしみてくる

八尾市 高橋 夕花

大阪市 江城 修史

着飾って公書程によく喋り
愛憎のしこり台詞のないドラマ

松江市 梅本登美也

ゴキブリが笑って見てるコマシヤル
やっとこき黒字になると持病出る

唐津市 岩崎 実

法事すみ妻の手にしたお小遣い
海が好き山が好きとて夏に入る

米子市 佐伯 越子

私の悪心が刃の上走る
空涙と知っててピエロで踊って見る

尼崎市 黒川 紫香

地下街で迷うてガムを踏まされる
方便の嘘が言えない髭を持ち

大阪市 河野 君子

肩の荷を下ろす他人のひとこと
家族書へまじめに蛙の子を並べ

神戸市 和田 恭子

吾子のごと沈み給えや膝枕

青森市 工藤 甲吉

秋風と共にうらなりうらぶれる

香川県 三井 酔夢

幻の君は楚々たる白緋

神戸市 宇佐美和子

父の旗はいつもひとり
団体で来た小京都は物足らず

羽曳野市 麻野 幽玄

外では泳ぎ内では泳がされ

橋本市 森脇 善彦

社の人事追越し禁止などはない

今治市 園部 正則

陽性な入歯艶笑譚つづる

滋賀県 榎木 踏草

強情な上にあなたは無責任

倉吉市 奥谷 弘朗

長男にまだ放蕩の血が残り

平田市 久家代仕男

よきによきと角が可愛い金平糖

島根県 榎原 秀子

握り締めた砂に未来は託せまい

倉敷市 齋藤 通風

秋風が揺ると慕情となる化石

和歌山市 松原 寿子

大早渴きに耐える墓石群

枚方市 宮川 珠笑

老いらくの視野に慕情の月見草

八戸市 小泉 紫峰

別人になって挫折が起ち上る

神戸市 小浜 牧人

食べたいという病人を待つ料理

神戸市 来住タカ子

園部 正則

榎木 踏草

奥谷 弘朗

久家代仕男

榎原 秀子

齋藤 通風

松原 寿子

宮川 珠笑

小泉 紫峰

小浜 牧人

来住タカ子

北 勝美

松崎 公子

井上柳五郎

西出 一栄

西出 一栄

今の世に心の躍るラブレター

岡山県 直原七面山

どの孫も叱って老いの夏盛り

宝塚市 吉田 笑女

皮膚感覚を敏えなおしているカメラ

岡山市 船越 汽水

鮮紅の花とうがらし原爆忌

岡山市 岩田 美代

波寄せて海の宴の影おどる

岡山県 出原 敬一

おしゃべりが長びき粗末な夕の膳

東大阪市 竹中 綾女

ギフト券手軽う夏のご挨拶

倉敷市 小幡 里風

当りまえみたいに大物運刻する

今治市 月原 宵明

どこまでが二百海里かいわし雲

唐津市 松垣 岩光

東北の蕨餅ですはこ(冷)いです

豊原川市 小林鯛牙子

遊面は頼母しがられ恐がられ

羽咋市 三宅 ろ亭

直原七面山

吉田 笑女

船越 汽水

岩田 美代

出原 敬一

竹中 綾女

小幡 里風

月原 宵明

松垣 岩光

小林鯛牙子

三宅 ろ亭

池田 半仙

池田 半仙

長尾 保

筒井 朴竜

山下 勝一

高槻市 若柳 潮花

三十五度カンナは情い色で咲き

堺市 高橋千万里

飲んできたなと耳もとでささやく蚊

和歌山市 沢山 福水

下町に育つて少女気が強い

島根県 飯塚 虎秋

東京で泳ぎ疲れて波の音

大阪市 神夏磯道子

鍵っ子に夕陽が赤い砂あそび

生駒市 草深 醉升

無駄口を聴く耳持たず嫌われる

大阪府 新川 貞祐

足腰がアルバムに余白残しそつ

今治市 越智 一水

赤ジュウタンふめばふるさともうわすれ

和泉市 西岡 洛醉

母さんの心の大樹の影に居る

唐津市 新潟回天子

飾るだけ飾って女の出ずる幕

香川県 田井 教之

仲間はずれもたまには乙と笑つて

島根県 岩田 三和

争いはプラスマイナスあるかぎり

彦屋川市 江口 度

やるだけはやったと余生送る妻

尾鷲市 渡辺伊津志

籠の手に絡ませている藤の花

東大阪市 加藤千代子

金魚すくい浴衣の袖を親が持ち

松江市 岡崎 祥月
猛暑炎暑酷暑を縫うてペタル踏み

松江市 岡崎 雪美
孫二人両手に花のむし暑さ

出雲市 板垣 夢酔
一番星で泣いたは二等兵の頃

富田林市 中村 優
細々と眉を書いてる夜の顔

八戸市 島田 昭治
亡父恋し残業終えて墓に寄り

海門市 牛尾 縁楼
親心読めないままで親になり

貝塚市 行天 千代
年金で勿体ないが旅に出る

宇部市 樋村 天流
ライバルに仲人という借りが出来

唐津市 桑原 掬治
里帰り東京弁もちとまじり

東予市 小山 悠泉
恋せよと月がささやく散歩道

東大阪市 竹中 肖二
腹案が出来てペンキ屋刷毛をとる

堺市 伏見 茂美
息してるのたまに電話を掛けて欲し

大坂市 欄 蘭
靴までがくたびれている職探し

岸和田市 池田香珠夫
丹精のバラの盛りを霊よ見よ

〔評〕日本には原爆忌と終戦記念日が来る。暑い。積乱雲が聳え夾竹桃の花が咲く。雲の峰の果てから戦没者の声が聞える。

阿鼻叫喚、怨嗟のうめき声も三十三回の忌を重ねるとつぶやきのような、淡々と経を誦すような響きになってくる。このナレーション、解説的語り口のものでは軽薄になる。本来の意味の物語であらねばならない。聞える者には聞える、死者の声のナレーションだ。美幸さんの句、死は出船に喩えれば良いのか入船に喩えれば良いのか、人それぞれの宗教感によって異なる。光明に溢れた旅か、冥界をさ迷うものかも弁じ難い。人の死の静かな一形態を捉えている。第二句の蟬と蜘蛛の対照も面白い。日滴さんの句、軽い表現の上句、中句下句の力強さ、殊に中七が際立っている

ので作品が生きた。白汀さんの句、出土した人形や馬形の埴輪を云ったものであろう。数千年の拷問や、とは誠に云い得ている。太茂津さんの句、今に種を愛用する嘗ての一兵の感慨である。軍国主義の真只中に半生を生きて来た作者ならではの句と云える。千翁さん

のは二句ながら感覚で捉えた佳句。万感の中でも、葦のような細く深い感覚が最も鋭く反応しそうだ。夕花さんは蟻と云う対称をよく見詰めておられる。だから独特の感慨がひらめくのだ。

一句組では、恭子さんの思いの深さを盛り切った句と甲吉さんの句のリズムの卓抜さに注目した。

—水煙抄—

秀句鑑賞

—前月号から—

岡村 久志良

雑兵が負けずぎらいの妻を持ち

梅本登美也

下積みに甘んじるお人好の旦那さんをほらはらさせて、いたるところトラブルの種を蒔いて歩く負けん気の妻君。軽い穿ちの愉快なスケッチ。

草の匂いさせて子供等通りすぎ

松本 文字

子供の生活が都会化したというが、田舎の子までが野生味を失って来たといわれる此の頃、陽灼けした遅い少年群像を捉え、匂もまた健康。

バス停がいつもと同じ朝にする

西山 幸

そこに停まっているのは大体いつもの顔馴染。話題もまた相も変らぬ四方山話。そこに庶民の安らぎがあり、庶民の詩が生れる。一寸の虫を殺した手を洗う

文川 野生

その五分の魂を奪った小さな悔い。罪に穢れた手を洗うしぐさを坐五に持って来た句の構成見事。

右の掌の怪我を左の手がかばい

岸本 無人

血の噴き出る右掌の傷口をさつと左手の指が押さえる。その個体の機能的な本能的な動作は、人間関係で云えば骨肉の愛情の表現と同じである。血のつながりは恐ろしい。

隙のない女の部屋を見たくなり

田中紀美子

メイキャップ、和服の色、柄、仕立て、そして着付け。洗練された裾さばきの後をつけて……止しなさい、部屋は覗かぬこと。すべて幻滅を味あわぬためには、何%かの想像の世界を残すが賢明の策。その反語か？

柔肌にふれて楽しいバス揺れる

松垣 岩光

秀句には違いないが、本欄にとりあげた魂胆は、目尻の下った鼻下長氏に一言ご忠告申し上げたかったから。「しっっかりして下さい、まだ朝ですよ、ご出勤の途上ですよ」。疑いを知らぬ笑窪が突きささり

飯塚 虎秋

彼岸花をあしらった肩上げの浴衣がよく似合う女の子。媚さえ含んだまんまるいあどけない瞳が僕の髭面を見上げてにっこり。しっっかりしなくちゃあ、頼りないパパとは知らぬ可愛い片笑窪に申し訳ないぞ。瘦せた毛脛を撫でるパパの瞳にやり切れぬ哀しい彩を見た。

愛情のちがいを犬に見透され

今谷 紫園

ポチ、ポチ、満面の笑みで呼んで見たが知らん顔。ビスケットを取り出してこわごわ鼻先へ持ってゆくと、いかにも大儀そうに起きあがる。こいつ、僕の犬嫌いを見破ったか。「お待ち遠さま」出て来た彼の女に尻っ尾を振ってじゃれついたが、樟脳匂う外出着と知ったポチの、彼女を見上げた物哀しそうなその目の色。

無精髻少年Aと思われず

文川 一念

教職四十年の私にはびんと来る句である。このようなユーモラスな句がもっと欲しい。吊り革に美人が居ない本を読む

香川 亜成

私の珍重している染焼きの菓子皿に「佳きひとの隣り坐りて新聞を読めども読めぬ汽車のゆすれに」稚拙な文字で歌を書き、童牛とサインしたのがある。貧乏人からは金を取らなんだ奇人、家本弁護士作品。家本老が新聞が読めないのを汽車のゆすれと逃げたはにかみが面白いではありませんか。亜成さんの、これだけ白状出来る純真さは、私の好きな良寛に迫まるものがある。褒めすぎかな。

女性党思い上りを悟りしか

加藤千代子

この辛辣な諷刺に一驚を喫したが、女性の句とあって二度喫驚。きつぷのいい啖阿は、秋の柳誌を彩どる一粒の山椒。

小島蘭幸著

句集「再会」に

よせて

菊 沢 小 松 園

句集を出すことは川柳や俳句をやっている人達の念願であるが、各人の気持や都合でなかなか自然発火のように行かないものである。句集「再会」を手にして第一に思ったことはこの人、蘭幸君は倅せな人だと言うことであつた。結婚記念句集こんな嬉しいことは今迄余り聞いたことがない。大抵の人は還暦だとか、古稀だとか、喜寿だとか、年齢の斜陽になってからの人達が多いことを思うと、何としても倅せな蘭幸君と言わなければならぬ。

歎むだけの男索性を明かさない
外柔内剛長男として生まれける

この句集を手にして句に目を通して居ると時々作者の年齢を忘れる。それほど世智に丈けた鋭いところがある。謙虚な口数の少ない好青年が案外深い処を見て居るのには驚かされた。こんな人達がどんどん出てほしいと思つた。外柔の句も自分の生活の一コマに過ぎな

いが句主自身としては長男と生れた宿命の上から、どんな些事おもそれに結び附けている表現に他ならない。昔から川柳の形式は世界的な表現法の上にあらゆる人事百般を内容豊かにしようとして多くの川柳人が日夜単調と姑息とに闘いながら努力して、万能の方法を模索して専ら余韻だとか余情とかにその万端の捌け口を求めて居る。蘭幸君もその熱心な一人に他ならない。

元旦の石段ひとつずつあがる

この句のうらに平素の注意深い著者の眼がある。ひと捻りした表現が心憎いほどだ。

完全を求めぬ女で恐くなる

ちっほけな意地二階から降りて来ず
ダンブからわざわざ降りて怒らはり

これ等の裏に完全を追求する若者の眼が鋭く光っている。ユモリスト蘭幸の片鱗も充分に窺えること勿論である。

砂丘行く恋に終りがないように

先日、森田若人忌句会で行つた鳥取砂丘を思い出した。一面に拡がった砂丘見飽かぬ景観であるが句にならぬ、帰つてこの句見てもよく詠まれたと感じた。この句集には年齢を感じさせない面白さがある。若いということはいよいよこととおもう。

この句集の総論は端的に言えば暖昧さの無い足を地につけて明日を担う若人の真面目さ

の表現だともう。
句の巧拙や深味や幅はこれからの問題だともっている。

遺 句 集

「鉄道草」

発行して

山 内 静 水

編集部からのテーマは、発刊の感想を原稿紙に三、四枚とのことであつたが、そんなに書いても私は何を書くやら分らなくなるので、ズバリ要点だけ述べさせて頂きます。

句碑建立となると、偉い方の名前がずらりと並んで、相当の基金が集められているのに対して、何故、仏になった人の句集が、香花を供えたと思ふは済むものを、読んで貰えないのだろうか。この大会ならと四、五冊持つて行つても、手にもとつて貰えないなんて、仏に対して申訳けない気持でいっぱいである。

それだけに見ず知らない人から、温い手紙まで添えて望まれた時の感激はひとしをであり、近い内に、そのお便りの把と、まともたお金を仏前に供え、いろんなことを報告しようと思つている。
— 妄言多謝 —

句体は人なり

川柳「柳行李」(非売品)

傍島 静馬 著

ことしの二、三月頃だったか、静馬さんから句集を出す相談をうけた。令息たちが応援してくれるとのことだった。

静馬さんなら、さぞ楽しい句集が出来るだろうと、その時からたのしみになっていた。

「句は人なり」といわれているが、ぼくは「句体は人なり」としている。作家には、「文体」というものがある。まわりくどく書く作家や、単刀直入的に簡潔な作家など、それぞれに文体を持っている。

静馬さんの句体は、上品なユーモアがバックボーンになっている。句会で選者が披露した場合、クスクスという笑い声がある。ハハ、静馬さんだな、と思った瞬間「静馬」と呼名がある。ここで始めて場内をゆさぶるような笑声が起る。この句集には、そのような句がどのページにも配置されてある。一書評は次号で古方氏が書くことになっている。これは前座の文である。

発行者―宝塚市武庫川町四一八一五

傍島 静馬

川柳句集

「昏れて」

小宮山雅登作品集

序―河野春三・跋―石曾根民郎。これで異色句集ということが分かる。

―現代川柳の正統派の盟友松本芳味君を喪い、今また雅登君の訃を聞いて全く断腸の思いである(河野春三)。―B6判・千円・送料一六〇円

―食卓にとよめく家族の 洒れたる箸

発行所 千390松本市大手三151―三

しなの川柳社(振替長野三五六三)

句集

「影法師」(非売品)

岸本 木魚 著

岸本木魚氏はご承知のようにベテラン作家である。「川柳雑誌」時代から「川柳塔」の今日まで、長い年月ご愛読いただいている。

表紙の題字や口絵の色紙、短冊の文字はプロの筆跡である。見事の一言につきる(F) 影法師ゆっくりあるけとむしもなき

発行者 和歌山県橋本市隅田町山内二〇九

一 岸本 木魚

第11回 東大阪市文化祭参加

第5回 川柳大会

日時 昭和五十二年十月二日 (日曜日)

正午開場、出句締切一時半
場 東大阪市立中央公民館二階
視聴覚教室

柳 兼題及選者 (選者、姓のアイウエオ順)

魂の人の人 伊藤 勢火氏
あの人 上野山 東照氏
悪筆 大神 古梅氏
未練 金井 文秋氏
旅情 香川 醉々氏
紙 河内 天笑氏
港 久保田 寿界氏
風 田中桂 太楼氏

二題(題は当日発表)
選者: 珍彦源次郎氏・片岡湖風氏

出句 兼・席題共各題二句以内(締切一時半厳守)
出句は出席者に限る。(兼・席題共当日会場で受付)

賞 各題最優秀句に東大阪市長その他の賞状及び副賞を贈呈する。

会費 五百円也 (呈・大会句報)

懇親会 式千円也

主催 東大阪市文化連盟・東大阪市川柳同好会
後援 東大阪市・東大阪教育委員会

忌人茗 記会参大会柳川

人 牧 浜 小

8月27日午前10時30分大阪発の日交バスは大会参加の西尾梨副主幹をはじめ一行九名を乗せて、霧に煙る山脉の谷間を縫って垣々と延びる中国縦貫道を走り、午後二時目的地の終点鳥取市へ着いた。一栗、小松園、薫風、雀踊子、岳人、漫柳、弥生、みつほ、牧人が参会。

終点では茗人未亡人、河村日満氏等多数の同人柳友の出迎えを受けたわれわれは久瀧の挨拶もそこそこに、うみなり柳友の予定され

たスケジュールに従いマイクロバスに乗り替えて市内観光と名産の梨狩り及び砂丘見物へ向う。

兩川洋々氏の蘊蓄を傾けた名ガイドに依って市の銀座街から丸の内の官庁街、城跡の堀端を通って市外へ出る、長い墜道を抜けて遠く砂丘を望んで走ること数分梨園へ到着。木からもぎ取った20世紀梨に初秋の爽やかな味覚を満喫、折りから降り出した小雨の中を梨園の前に広がる大砂丘へと歩を移す。

雨の砂丘は人もまばらで点々と傘の花が開いていて旅情をそえる。我々はしつとりと雨に濡れた砂に旅の足跡を残して砂山のうねりを越えて海岸まで歩く、日本海の眺望は残念乍ら遠く煙霧に遮ぎられて最近の漁業問題の如く暗く鉛色に沈んでいた。

浜坂の遠き砂丘のなかにして

さみしき我を見いでけるかも

武郎

有島武郎の情死一カ月前にこの砂丘へ来てうたったと言われる歌碑が一本の松を前景にしてポツンと建っているのが印象的であった。砂丘をあとに同人加藤貞山氏の招待に依り同氏の立派な新築の御宅へ立寄る。心づくしのお茶の接待を受け、同氏が阪時代の川柳にまつわる思い出等湿じえなつかしき歓談に時を過ごす。かくてこの日の予定は終り、夕方五時過ぎ市内の小銭屋旅館へ入る。

一風呂浴びて昼間の汗を流しすがすがしい気持ちになったところで、うみなり会の有志の方々と会食の膳を開む。同人の気易さで硬軟

傍島静馬著

川柳句集「柳行李」

川柳人といえはマジメ人間が多い。そんな中で、この人は若い時分に遊んだなど、感じさせるいわゆる「粋人」はすくなくない。静馬氏は多く語らなすが、酔いも甘いもよく知つていのある老練士である。なんともしえぬ味わいのある清潔感にあふれる人でもある。句は人ともいいうし、句の姿は人の姿ともいわれているが、そんな静馬氏を本にしたような句集が「柳行李」である。

24年間本社句会連続出席。とにかく川柳をよく愛している人の本だ。(F)すねられてインスタントを食べさせられ発行所 宝塚市武庫川町四一三一八一五

傍島静馬

の話で酒盃のピッチがあがる。興至って豊生氏の貝殻節の美事な咽喉に聞き惚れる。やがて地許の方々には明日のこともあり引上げてゆくと共に会食を終る。少憩のち夜の市内観光へと洋々氏のお誘いである。

街角で呼び合っている宿浴衣

ハイボールを傾け乍ら同郷のめぐり会いを頻りになつかしがる一駒もあって句会前後の飯を十二分に尽して帰宿11時過ぎ就寝。

28日句会当日は今にも降り出しそうな空模様の中を10時前我々は会場へ入る。

茗人氏の遺影を正面に飾った会場には既に

故人を偲ぶ多数の参会者が出席当日の席題を熱心に作句していた。

定刻10時、両川洋々氏司会のもとに小林由多香うみなり川柳会々々長の開会の挨拶、つづいて若人未亡人、河村日満両氏の挨拶があり句会が始まった。

尚句会に先立ち日本海新聞主催の川柳年度賞第一回若人賞の受賞者を主催者より別記の如く表彰が行われた。

午後1時出句締切、当日の出席九五名と発表。選者が別室にて選句中を西尾副主幹が立たれて川柳よもやま話が笑いを混じえて行われました。お話の中で特に最近の川柳の傾向としてしばしば難解句が目につくが川柳塔としてはあくまでも誰にでもよく分る句をつくとする本筋を逸脱してはならないと力説されて作句の指針を示され出席者へ強い印象を与えられた。2時30分一同待望の選句発表となる。点数上位の入選者には表彰の楯が贈られるので披露に際しての呼名も力が入っている。各題の名句佳句が次々と発表され場内には熱気がこもり句会も盛上った雰囲気となる。就中天地人の秀吟には拍手鳴り止まず、かくて全披露を終えた、総合一位は米子の名花八木千代さんが獲得、名誉の楯を手にせられた。

ここで強く感じたのは先程副主幹のお話でも触れられていた難解の句が一句もなく、入選句の総てが分り易く素直な句であったことに一種の安堵感を持ったことと同時にうみなり川柳会の伝統を強く感じたことであった。

閉会後直ちに懇親宴に移りそれぞれ盃を交わして柳交を深め柳談つきぬ裡に残念乍ら我々には帰阪のバスの時間が迫り、宴の途中にて会場の拍手に送られ乍ら再会を約して会場をあとにした。

尚この度我々一同に對しうみなり会小林会長はじめ皆様の御親切な数々のご配慮有難く又米子の八木千代、石垣花子様様の温い御厚意有難く御礼申し上げます。

第一回若人賞・日本海新聞社主催・川柳年度賞一

仲直りする気絵本も貸している 福田保子
若人忌川柳大会

一位、八木千代。二位、沢車楽。三位、今村夕路。

若人忌川柳大会各題秀吟

席題「弱い」 松下たつみ選

ワンマンの弱味老婆だけが知り 八木千代

席題「蓋」 奥谷弘朗選

蓋を兼る様に政治をのそかせず 小西雄々

兼題「再会」 小林由多香選

再会の握手はまわりまで温め 河村日満

兼題「供養」 河村日満選

にくしみがまた燃え上る原爆忌 今村夕路

兼題「残暑」 菊沢小松園選

餌をさがす残暑の蟻は殺気立ち 石垣花子

兼題「あわてる」 沢車楽選

アメリカのくしゃみにあわてる我が日本 回春子

兼題「回る」 橋高薫風選
石臼を回すと奈落の音がする 但見石花菜

岸和田市文化祭参加

第27回市民川柳大会

日時 昭和52年10月23日(日曜日)

十二時半～十七時

会場 岸和田市民会館地下ホール

柳話 川柳塔社主幹 中島 生々庵

兼題 「無理」 野村太茂津選

「横」 梶川雄次郎選

「招待」 八木摩太郎選

「風」 榎本 聡夢選

「遠慮」 菊沢小松園選

「腹」 高橋 操子選

席題 当日二題発表(兼・席題各2句)

呈賞 市長賞・議長賞・教育委員会賞・文化協会賞・岸和田川柳会賞。

締切 十四時(出句は出席者に限りま

す)

入選句集代 三〇〇円

主催 岸和田文化協会

後援 岸和田教育委員会

岸和田川柳会

連絡先 〒596 岸和田市土生町一九

八九一八 高橋操子方

(電〇七二四〇〇四九番)

預金高

玉置 重人 選

預金高見て増築をあきらめる
 預金高ながめ政治をうとんじる
 地獄で仏母が残り不安な預金高
 今死ねばちよつり不安な預金高
 預金高あてには出来ぬが汗の金
 夢だけはデカイが増えぬ預金高
 孤老の死意外な預金額が知れ
 へそくつて夫に内緒の預金高
 ボタンでも珠はじいても増えぬ残
 預金高に見合うローンの家が建ち
 なん冊もあるが半端な預金高
 産んでよい共働きの預金高
 ゼロ一つ増えて余裕の預金高
 変動へ不安持ちつつ預金する
 へそくりをこつそり足した預金高
 銀行が挨拶にくる預金高
 預金高広げて旅のプラン練る
 預金高低目に告げて締める妻
 手形切るその手がにぶる預金高
 目減りすると知っても小金貯める父
 預金高デノミの声に揺れている

夕路 天彦 勝一 翁童 無双 無双 虎 みのる 七面山 貞祐 洋々 夢酔 登美也 秀峰 秀則 肖二 方大 洛醉 右近 春日 通風

よく貯めたものだとトルコ嬢の笑み
 ステレオを買うつもりし預金高
 目的は旅行バイトの預金高
 預金高事件推移の鍵となり
 スケジュールあちこち削る預金高
 預金高夫婦ケンカの種となり
 嫁ぐ娘の仕度へはたく預金高
 預金高の赤字に銀行慌て出す
 預金高はじく電卓大き過ぎ
 預金高妻の手渡がゆるまない
 預金高告げずに渡す子の門出
 預金高あの汗この汗思い出す
 預金高ゼロでもすくすく子が育ち
 威勢よいプランがしばむ預金高
 預金高愛の結晶考える
 預金高二人の夢を温くめあう
 蟻塚に負けそう我が家の預金高
 預金高減ろうが一肌ぬぐ気なり
 嫁ぐ子へ預金高など言わず
 営営と蟻の冬越す預金高
 預金高そろそろ結婚したくなる

佳 度

しあわせがくるさ日銭を貯めている
 出稼ぎのよろこびを知る預金高
 ハートをつかんだ時に預金ゼロ
 一万円預けてマル優気にかかり
 胎動へ準備はOK預金高
 人

パラソルの中から預金高聞かれ
 伊津志

岩光 宵明 隆子 抱治 里風

離婚などとてもとてももの預金高
 天 預金高零幸いにも恙なし 素身郎
 三人の娘へせつせと預金高
 縁結び

縁結びが農家にやらぬお百姓
 縁結びの労に報いるお中元
 縁結びの印鑑ならぶ縁結び
 相愛の印鑑ならぶ縁結び
 永遠の平和へ結ぶ姉妹都市
 縁結びできて神様ほつとかれ
 もと恩師もと教え子で結ばれる
 親子ほど違う不思議な縁結び
 縁結びになったピアノも売払い
 又一つまとめて街に住みなれる
 順調なとき仲介人は忘れられ
 あの一瞬電車がゆれた縁結び
 ほころびをそつと見付けた縁結び
 合理主義コンピューターで縁結び
 縁は異なるもの惚れて結んで五十年
 テレビ局集団見合い縁結び
 ハネムーン明日から何と呼ぼう彼

大江 秋月 選

茶人 七面山 優 木蔭棒 本蔭棒 古方 豊生 可住 悠泉 綾女 弘朗 木魚 路草 亭夫 保夫

漫柳

縁結び助ける巫子が嫁きそびれ
 世話好きの上司に忙しい縁結び
 豊年が縁談早く実のらせらる
 出雲からお召しが来ないかず後家
 神様も思案の果ての縁結び
 二見浦女岩に男岩縁結び
 仲人のお世辞が続く縁結び
 再婚は子連れ同志の縁結び
 悪友の気まぐれからの縁結び
 集団見合い見る目見られる目が火花
 縁結びの神様うちの娘を忘れ
 縁結びのきつかけとなる雨やどり
 スキー場小さな怪我が縁となり
 玉砂利の音も嬉しい縁結び
 子を連れた再婚同志で縁結び
 出雲さんわたしに過ぎた嫁をくれ

お通夜の席で縁談の話が出
 縁結びの神のいたずらから夫婦
 俄か雨傘がとりもつ縁結び
 縁があれば結んであげたい身障児
 連続で軒も傾く縁結び

十度目の見合い得心したらしい
 縁結び順序は言わぬ五女の父
 疎開地の幼馴染みと結ばれる

先輩として引受けた縁結び

洋人 保夫 無人 弘朗 隆子 朴竜 裕醉 宵明 可住 綾女 肖二 登美也 越子 正則 逸名 素身郎 道子 恒治 秀峰 踏草 里風 春日

読 書

岡村久志良 選

ベストセラー旅行靴に入れただけ
 ぶきこちよな指でページを繰る読書
 閑職は肩の凝らない本を読み
 居眠りを読書のふりでカバーする
 筋書きは催眠術か眠くなる
 読書善哉きのうの誤字を教えられ
 読書三昧妻の雑誌に教えられ
 傍線で人柄を知る本を借り
 旅衣肩の凝らない読書する
 へべれけの父を迎える読書の灯
 よく書物読んでいるような話し振り
 一通り本を読んでいる巾を見せ
 蟬時雨暗夜行路へ睡魔来る
 劇画ならよう読みますと云う返事
 孫にもう原色百科予約する
 儲かります本読む暇ありません
 晴耕雨読の私に読みたい本ばかり
 長髪にしてマルクスを読み耽り
 週刊誌も読書マンガも又読書
 読書室レギュラー同志目で会釈
 顔に本伏せて夜長の一頁
 虹汀

柳五郎 正則 善四郎 越子 夢醉 天流 優彦 美彦 本蔭樺 春日 木魚 芳仙 古方 三十四 七面山 洋々 右近 保夫 亭

気の弱り作者の筆にゆすぶられ
 立読みのそへはたきの音が来る
 一頁の読書に人の徳拾う
 読書三昧作句三昧秋夜長
 立読みですませ本代で弾く玉
 読書する構え字引きを積み重ね
 週刊誌で仕入れた程の知識です
 一頁一頁先人の深き追う
 眼鏡買い替えて読書の秋近し
 宵茶貼り替え漢詩解いている
 定年の読書机に足を上げ
 晴耕雨読とは定退の負け惜しみ
 貧乏はしても読書のゆとり持つ
 貧しいが心の隅に本があり
 出版の洪水良書が埋没し
 図書館へ通ってママを喜ばせ
 読書する孤高姿勢をくずさない
 積んどくでよい又しても買うてくる
 越味欄に読書と書いていじめられ
 良寛全集良寛百考竝べとき

狗治 岩光 洛醉 祥月 貞祐 伊津志 可住 和子 弘朗 道子 美紀子 思月 登美也 古方 古方 方大

▼一路集の選者にお願ひ―二十字詰で書いて
 ください。一字下げると十九字詰になりま
 す。雅号は三マスに、佳・人・地・天など発
 表通り句の横へお願ひします。―編集部―

初歩教室

題「捨」

本田恵二郎

何かのチャンスに恵まれて、川柳作句を始めた頃、作句力向上の原点は多読多作だと先輩に教えられたことを、誰れもが体験しておられることと思う。私もそれを教えられ、共鳴して、血みどろになって実行した過去をなつかしく思い起す。ところが長い年月の作句生活のうちに、量より質という方向をたどってゆくものであることを発見したことも、忘れられない思い出となっている。

質ということは、その作家の個性とか、持ち味という意味も含まれている。その質は良質であらねばならぬことは言うまでもない。質の向上ということへの努力を、みんなで励し合いながら続けたいものである。捨てるもの全部捨てたよ出直そう。教之(捨てるもの捨て去り振り出しで構え)
(捨て去って心も軽し身も軽し)
捨てるもの捨ててもまたまた湧いてくる。同
(捨て切ったはずへまたまた湧いてくる)

捨て猫を捨てに行くとは子に告げず 善 瀨

(子が寝てる隙に小猫を捨ててくる)

歳月を越えて捨て得ぬ恋一つ 同

(五年越しまだ捨て切れぬ恋ころ)

使い捨て僕もスベアーだったのさ 同

(使い捨てにされスベアーだったと知り)

捨身業思わず一本と声を出し 英 二

(あざやかな捨身の技へ満座湧く)

私欲捨て国民愛す政治家欲し 同

(政治家の私欲をかいま見た或る日)

捨てるには惜しい空箱もて余す 英 子

幸福を捨てた女に見る強さ

捨われよと頭撫ぜなせ捨てられる 同

何もかも捨ててしまいたい老の坂 紫 園

(何もかも捨てて気楽な老の坂)

煩惱をもう捨てなくちやおじいさん 同

捨てるもの捨てて残した趣味一つ 同

目の合うた捨猫必死について来る 紅 扇

こだわりを捨てて合わせる同居です 同

捨てきれぬ恋人ねむっている文箱 同

捨て切れぬ家風へついて来ぬ若さ 同

(この調子だ、精進あれ)

捨てる気の我楽多結局また仕舞い 飄 太

捨扶持に甘んじている再就職 同

捨てるのは惜しいが残せば嵩高い 同

(捨てるのは惜しいが嵩高い)

姥捨山今も養老院に生きている 同

(養老院姥捨山を想わせる)

甲斐性もないのにきつい捨台詞 静 子

捨て台詞なぜか心に突き刺さり

紅 葉 山

一度捨てた命何ももの怖くなし 同

(捨てた気の命にこわいものがない)

終戦に捨てた命だ惜しくなし 同

(南方で捨ててそこなつて古稀還え)

捨て石を捨てて沈む人柱 貞 祐

捨猫にもめぐるおぼろの春の宵

捨てるようなものだと嘆く税の額 柳 五 郎

(捨てるようなものだと嘆く税の額)

祖母の目に捨てるに惜しい物ばかり 翁 童

捨てる神ばかり都会の吹きたまり

祖母の部屋捨ててもよいな物ばかり 同

捨犬に俺の昔がなつかしい 昭 治

(捨犬が昔の俺に似てあわれ)

企みを捨て夕顔の美しい サ ヨ

屋上に恋のかけらが捨ててある

病友と愚痴捨て合うが捨ててある 同

捨てること得意の嫁に苦言をし 静 枝

(捨てるのが得意の嫁がまた捨てる)

姥捨の世に生れずも自殺をし 同

(姥捨の世ではないのに死を選び)

捨てられた猫に秋雨降り続き 俊 風

(捨猫へ秋雨無情に降り続く)

捨猫の骸へ野菊摘んでやり 同

(捨猫の骸野菊に取り巻かれ)

捨てられた雑草慈雨に育てられ 静 佳

捨犬のおずおず馴れてくる野犬

(捨犬のおずおず生きることに馴れ)

児を捨てた母拾つてる恋の道 同

(児を捨てた母が邪恋を拾い当て)

同

同

同

同

同

再会の手ぬくもりを捨てて来る

(再会の手ぬかき捨て切れず)

捨て難い味再会の手ぬ味)

捨石になって社運に賭ける男

(社運に賭ける気捨石になり切つて)

捨て難きは亡娘が持ちし扇子かな

(迎え火へ亡き娘の扇子捨てて難く)

狛犬の膝で捨猫昼寝する

胃の半分切り捨て達者になりました

女を捨ててました寡婦の太い指

捨印のようなボジション与えられ

捨石になったつもりを引出され

捨て売りの声に余分なものを買い

出直しへ捨てねばならぬ切符です

捨てきれぬ憂さをガラスの底に溜め

頼次

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

捨てられた種子隅っこでひそと生き

捨て金の多き弔問続

捨てた石の重味庭園生きている

年取つた順に捨て鐘よく聞え

捨てての方が問題いのちの昨日今日

捨てて神ばかりに見えてくる不況

姥捨てて人間らしく生きようか

捨て球もある人生の長い道

切捨てをやらねば取れぬ注文書

栄転からまたも除外の四捨五入

強敵へまよ捨て身の体当り

捨て猫の夢は三食昼寝つぎ

捨て石の曰く世が世であつたら

(快進撃だ、ご精進を祈る)

泰平になれて使い捨て根をおろし

伊津志

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

捨て犬を連れて帰つてまた捨てる

夏休み拾つた恋と捨てた恋

四捨五入されて庶民の恨み節

流れない川に噂を捨てて行く

まぼろしのような初恋捨てきれず

武器を捨てて素手でつかんだ今日の幸

がらくたを捨てるに妻の智恵を借り

妻の目にまだ使えるを捨てる嫁

天秤にかけて名を捨て実を取り

割箸の勿体なくも使い捨て

捨て石になる気悪くじ引いてやり

同人

雅号ぶつちやげばなし (162)

うこん



のろ

野呂右近

大して由緒ある祖先を持ち合わせていないのですが、
受継いだ家紋が橘、その橘に因みまして当市に店を持つ
事になった折、家紋が橘だから屋号を右近にしたら、と
先輩の意見を素直に受け入れ、右近の屋号で開業しまし
た。呼び易いのかそれ以来私の本名は隣にかくれ、右近
一本で通るようになりました。川柳を初めるに当つても
屋号を雅号にして今日に至つて居ります。高槻城主であ
つた高山右近は有名なキリシタン信奉者とか聞いて居り
ますが、幸か不幸か私は特に信奉する神仏も無く、只川柳
を勉強し先輩諸氏のすぐれた作品を鏡として、多少なり
も共心のごれを磨き、良心に恥じない日々を送り度いも
のと念ずる次第であります。(和生菓子製造・六十八歳)

とき 十月二十三日(日)
ところ 八尾市農協会館

奇術発表会

第十一回

午後一時半開演
入場無料

関西奇術教室

題一月10月20日締切(12月号発表)

宛先 岡山県倉敷市下津井一―九―三四

千七一一 本田恵二朗

大萬川柳

「昼寝」

入選発表

選者 川村好郎
投句総数 五百三十四句
入選 五十四句

病室の昼寝を注射が来て起こし

神戸 牧人

資金繰る友に昼寝を起こされる

和歌山 久子

主婦としてちよびりうしろめく

羽野 幽玄

花園へ疲れた天使が来た昼寝

八尾 弥生

昼寝などさせそうもない基地の空

熊本 一進

年金の暮し昼寝をしてわびし

富田林 優

あくせくと昼寝もできぬ小商人

大阪 智子

サイレンをたしかめ昼寝またつづ

和泉 洛醉

夏休み昼寝の癖をつけただけ

兵庫 可住

快適な環状線でする昼寝

大阪 潔

炎天を昼寝どころか蟻の列

大洲 曉明

療養所時計の昼寝もて余し

堺 千万子

三食昼寝クロー付で病むベッド

宝塚 静馬

せつかくの昼寝を破る水道代

寝屋川 小路

添寝するママに昼寝の癖が付き

富田林 花梢

回診が安堵の笑みで見る昼寝

堺 一二三

2DK昼寝の夢もマイホーム

和歌山 武雄

久し振りの昼寝を姑に訪ねられ

大阪 あいき

心地よく浮浪者悔いの無い昼寝

奈良 保夫

保母さんがつい誘われている昼寝

奈良 カズエ

風鈴が昼寝誘うたり覚ましたり

西宮 百酒

ズタズタになった心でする昼寝

寝屋川 恵美子

嫁姑今日は昼寝に気が揃い

米子 千代

棟梁の昼寝計ったように醒め

平田 代仕男

蝉しぐれ次第に遠く昼の夢

大阪 一栄

昼寝していたらし電話の妻の声

倉敷 素身郎

父ちゃんのでこでも動かない昼寝

寝屋川 度

給油するように昼寝をむさぼって

大阪 一休

昼寝してみたいデスクで生あくび

米子 越子

五つ子の昼寝揃わぬママの愚痴

神戸 どんたく

名工の昼寝の猫は見上げられ

八尾 美幸

昼寝して今日を楽しいものにする

大阪 秀村

集金が追いかえされている昼寝

倉敷 里風

嫁と児の寝息静かな昼下り

鳥取 露杖

昼寝ぐせ秋の気配を覚えてつづ

ホステスの昼寝に母の髻があり

遠雷へ昼寝ねがえり打つただけ

今治 宵明

夫の汗にすまぬ昼寝をしてしまふ

長すぎた昼寝西日に起こされる

工事場の昼寝は避暑に遠くいる

八尾 夕花

禅寺の廊下で昼寝してみたし

八尾 鬼遊

昼寝でもしようひとりぼっちの日

和歌山 幸

昼寝から覚めて空しさ尚つものり

日曜の昼寝に匂う青畳

手形落して昼寝の高厭

当然のように昼寝もしてる妻

西宮 多久志

佳句

凡人の昼寝欲のない口をあけ

誠意と技術で
世界のために

SHARP

シャープ株式会社

堀 憲祐
思いきり昼寝がしたい五児の母

川西 洋敏
二人目を産んで昼寝も堂に入り

寝屋川 恵美子
育児家事家の昼寝を醒ますまい

下関 春秋
お隣りに昼寝の顔を羨やまれ

大阪 智子
人ノ句

夏枯れヘレジも昼寝という構え
倉敷 里風

地ノ句
昼寝する母は時計をはずさない
大阪 君子

天ノ句
昼寝から覚めて現実米を研ぎ

和泉 洛醉

選者吟
不甲斐ないギックリ腰という昼寝

昭和五十二年
ベストテン(八月現在)

一 花 梢 二、五 富田林

二 天 笑 二、〇 堺

三 憲 祐 一六、五 堺

四 幸 一五、五 和歌山

五 夕 花 一五、〇 八尾

六 一、二、三 一四、五 堺

七 美 幸 一四、〇 八尾

八 好 一 一四、〇 大阪

九 真 砂 一三、五 大阪

一〇 可 住 一三、〇 兵庫

一一 幽 玄 一三、〇 羽曳野

一二 多 久 志 一二、〇 西宮

一三 美 子 一二、〇 東大阪

一四 君 子 一〇、五 大阪

一五 鬼 遊 一〇、五 八尾

一六 軒 太 楼 一〇、五 大田

一七 恵 美 子 一〇、〇 寝屋川

一八 智 子 一〇、〇 大阪

一九 宵 明 九、五 今治

二〇 弥 生 九、五 八尾

二一 本 蔭 棒 九、五 奈良

二二 道 子 九、五 大阪

二三 幸 生 九、五 八尾

二四 一本杉 九、〇 箕面

以下略

昭和五十二年
度第十一回

「気まま」五句以内
締切 十月二十五日

第十二回(最終回)
「それから」五句以内
締切 十一月二十五日

〒583 堺市堀上緑町一―三―七
藤井一二三方

大萬川柳係

NHK川柳募集

課題 眼鏡(ハガキに三句)

選者 川村好郎
投句先

〒540 大阪市東区馬場町
NHK近畿本部

「老後をたのしく」係
入選発表

十月二十二日(土) 午前九時十五分
ラジオ第一放送(全国放送)

「老後をたのしく」の時間の予定

川柳塔社常任理事会(9月2日)

暑さのおとろえぬ、正に熱帯夜。王選手の
アロンを抜く756本が今夜にも出るか?
いやそれどころではない、翌3日には出たが
こっちは二賞の選考で殺氣立つ。

太茂津氏はご機嫌である。「川柳塔賞」は
西山幸さんに輝き、「路郎賞」の準優秀作第
一席に垂井千寿子さんが脚光を浴びるなど和
歌山バンザイのナイターとなった。

新役員は別掲の通りだが、現役員同様よろ
しくお願いいたします。

六百号を期して、川柳塔社が今こそ眠りか
ら覚める時が来たようである。「川雑」時代
から川柳塔の垢をつけてきた同志が今こそ立

ち上がる時なのだ。かつての「不朽洞会々
員」は胸を張ったものだ。その誇りを今一度
よみがえらす時が来たのである。しかしそれ
にはもつとと勉強することである。そして
根性を持つことである。他力本願ではな
く、われわれの筆魂で世に問うべきものを本
誌にぶつけるべきであろう。勉強と根性が
機関誌をささえる唯一の推進力となり、それ
がそのまま本社の発展にもつながるのだ。機
関誌はそのためにある。

(F)

出席―薫風・古方・水客・栞・形水・太茂
津・牧人・文秋・肖二・生々庵・小松園・一
三夫(敬称略)―10月の常任理事会は4日。

柳界展望

(原稿締切毎月末)

▼中島生々庵主幹は10月の大会シーズンに備えて健康管理にはご職業柄細心の注意を払われてゐる。

▼日本川柳協会加盟一覽表(7月20日現在)を発行。

―常任理事(52年度)理事

長・片山雲雀―副理事長・藤島茶六―同・中島生々庵

―常任理事・伊藤瑞天・石原青竜刀・伊藤柳涯子・西尾菜・堀口塊人・渡辺蓮夫

・柿沼考人・賀波沢黙六・川俣喜猿・白倉寿夫・野村圭佑・近江砂人・大井正夫

・大野風柳・大森風来子・山田良行・増井不二也・福永清造・越郷黙郎・小林万

川・後藤閑人・佐々木風石・岸田万彩郎・平賀紅寿・尾藤三柳諸氏。

▼日川協8月5日発行―そ

の後の加盟川柳社は「島根県川協会」「函館川柳社」「おかしようき川柳社」「津山番傘川柳会」「川柳すみやぐら」―会友・本田

溪花坊・富士野鞍馬(逝去)松本橋次氏が発表されて

いる。

▼日川柳全常任理事会は毎年五月五日を定例総会日と決定。

▼「川柳」川柳総合雑誌が構造社から出る。10月1日創刊号、A5判80頁、定価六八〇円、送料一二〇円。

執筆者に桂枝太郎、入江相政氏。そのほか尾藤三柳、藤島茶六、渡辺蓮夫の諸氏。T154 東京都世田谷区三軒茶屋二の一九(振替東京九一三一九一)構造社出版株式会社。

▼52年度文化祭祭川柳大会―第12回川柳文化賞贈呈式は11月3日午前11時から東京都中央区新富一の二六の八印刷会館で開催。投句者用の題は「壮観/鉦/交叉点/階段/暗算/夕刊/残念/敏感/投句料五百円・10

月20日締切。投句先T112 東京都文京区千石三の三五の三・白倉寿夫方。

▼故富士野鞍馬氏追悼句会は10月10日正午から、東京文京区民センター(文京区本郷四一五一―一四)で開催。「富豪」小谷源氏選「士氣」賀波沢黙六選「野宿」桂枝太郎選「鞍替」高橋まさじ選「馬力」蔵多李

選。席題三題・会費千円(投句拝辞)東京番傘川柳社。

▼第20回近県川柳大会は9月4日に開かれたが二五五名の盛会。関西方面から小松園、薰風、形水、雀踊子、牧人、凡九郎、岳人、酔々、美幸、漫柳、千寿子、寿子、百合子、鬼遊諸氏参加。なお特別課題で美幸氏が天位。岳人氏が第5位に食いこまれた。

▼堺番傘川柳会創立50年記念川柳大会は八月二十一日(日)堺市民会館にて開催。出席者二三八名の盛会だった。本社関係参加者は生々庵主幹をはじめ、小松

園、摩天郎、雀踊子、思月、誓二、天笑、草春、千

万子、茂美、美幸、漫柳、鬼遊、地方同人は春巳、カズエの各氏。

▼島田兼孝氏(大洲市)から―第29回えひめ川柳大会(8月21日)は一六〇名の盛会でした。思いがけなく総合優勝をしました。長野文庫氏も入選。大会は地元

の米沢晴明先生ほかの方々のご努力が実を結びました。

▼林明春氏(ハワイ)当地

梅田一番地

楽しいショッピングとくするの
くらしくつくるの
いこいを皆さ
百貨店



大阪梅田・水堀定休
阪 年 申
電(06)345-1201(代)

も雨量が少なく水の節約を守るようとのこと。若い人が川柳をやってくれませんかので詰友がなかなか増加しません。

▽同人の動向△

▼西尾菜氏(八尾市)は鳥取の茗人忌、弓削の西日本川柳大会へ休養を適当にとりながら同志を一人でも多く参加するよう呼びかけておられる。(竹原は断念されたが)

▼川村好郎氏(高石市)はNHK川柳のほか大万川柳

などがあり健康管理に努めておられる。(NHKの投句者から本誌購読者になった人が数氏おられる)

▼傍島静馬氏(宝塚市)は8月29日に退院された。なお川柳句集「柳行李」を発売。本社へ三〇冊ご寄贈いただいた。(本社では送料共千円でお取次ぎいたします)

▼若本多久志氏(西宮市)は日毎に快方に向いつつあるとのこと―癒ったらあの旅この旅夢の道―多久志。

▼小林由多香氏(鳥取市)から―若人忌には栞先生ほか大挙ご参加たまわり盛会にしてくださいまして御礼申しあげます。日本海新聞にも大きく報道されました。

▼河村日満氏(鳥取市)から―若人忌は96名という盛

会でした。ベ女さんは投句で総合一位でしたが出席者優先のため二位の千代さんが繰り上がりました。

▼新聞岡天子氏(唐津市)大阪へ用事が出来、8月12日ちよつと本社を訪問しましたが主幹にも不二田氏にもお会いできず残念でした。

▼西いわを氏(藤井寺市)は9月2日退院された。およろこび申します。

▼田垣方大氏(倉敷市)この年令になると、訃報ばかりです。伊勢市に帰郷中です―帰郷するたび級友減っており―方大。

▼沢山福水氏(和歌山市)は足が全治せず句会に出席できず残念です。▼不二田一三夫氏から―40年近い前、大阪梅田の国鉄職員で、文芸情報誌を発行

している友人に会っている時、そこへ来合わせた人を友人が紹介してくれた。名刺には梶川蘇堂とあった。友人と蘇堂氏の語らいを聞くともなしに小耳にはさんだのが水府、路郎という雅号だった。当時川柳には無関係だったが、一方をはめ、一方をけなしておられたようだった。―ふ誌九月号で氏の逝去を知った。8月29日胃ガンとのことである。合掌。

▼前号訂正「癌だよと笑って癌でない証拠」福浦勝晴。

▽旅 信△
▼若人忌句会から寄せ書拝受―雀踊子・みづほ・漫柳・弥生・岳人・薫風・栞・牧人―磨き砂こんなに集めてどうする気―小松園。

▼竹原近県川柳大会から寄せ書拝受―緑之助・好啓・鬼遊・美幸・凡九郎・漫柳・牧人・千寿子・宇宙太・寿子・岳人・雀踊子・薫風・形水―竹の里天の青さに触れんとす―小松園。

新同人紹介

佐 伯 越 子
ほ へ ちよ こと

栞・薫風・花子・瑞枝・千代推薦

▼10月の句会▲

▼川柳東大阪句会 は2日(東大阪市文化祭参加・川柳大会。―別掲)。

▼菜の花句会 は10日(八尾文化祭市民川柳大会。―別掲)。

▼南海川柳会 は20日午後六

時から南海電鉄本社食堂内で開催。題―序列・落ちこぼれ・チゲハゲ。

▼南大阪川柳会 は20日午後六時から松崎町三丁目大万で開催。題―情熱・アドリブ・夜更け・片手。

第24回 八尾文化祭市民川柳大会

とき 昭和五十二年十月十日(祝)正午開場
ところ 八尾市商工会議所 三階大ホール
近鉄(大阪線)八尾駅下車南東300m
八尾市役所前

開会の辞 高杉 鬼遊
お話―運命について 志水浩一郎氏
兼題及び選者(順不同) (席題)

「新聞」 堀 高
「ブル」 橋田 薫風氏
「考える」 室田 千尋氏
「坂」 深尾 吉則氏
「意地」 西尾 栞氏
「各三句吐」 締切午後一時三〇分
古川 鶴声

閉会の辞 581(八尾局私書箱第九号)
八尾市清水町一丁目一六
八尾市立公民館内川柳係
投句締切十月二日受付分まで)

※ご出席の方は当日投句受付いたします。
賞 各題最優秀句に八尾市長賞その他の賞品を贈呈する。
会費 五百円(呈・鉢植花及び大会句報)

懇親会 壱千五百円
主催 八尾市・八尾市教育委員会
八尾市立公民館
後援 八尾菜の花句会

本社九月句会

会場 金属会館

七日 午後六時

今月は句会案内ハガキ出さなかつたので、60名とふんでいたが、70氏のご参加を得た。ありがたいですね。

まず柳宏子氏から初出席の方々を紹介。各氏起立して拍手にこたえられた——増田次章氏（豊中市）小川佐知子氏（和歌山市）玉井邦晴氏（堺市）宮園みずほ氏（岸和田市）松田宇宙太氏（田原本市）山田育園氏（堺市）こんご共によろしくお願いいたします。栞氏の柳話には川柳にもアイデアをとというのがテーマだった。

かつて番傘川柳社の藤原せいけん氏を中心にした練習の会があって、そのメンバーに故岸本水府、食満南北両先生らも名を連ねておられ、たまたまコンニャクが話題になり、これがなかなかポイントが掴みにくく、そんな中で、水府先生は三角に切ったコンニャクへ串をさし「おでん」を描いて満場をアツと

云わせたとのこと。つまりアイデアの勝ちだった。川柳も題材を掴むには、正面から側面から、前後左右から「題材」を見よということである。（これは川柳だけではない、なににも通じる）

本社句会の出席王傍島静馬氏の句集「柳行李」にもついて述べられた。ユーモア味のあつた静馬調は豆秋さんの句にも負けないものがあるといふ。

英国風紳士の静馬氏をたたえ、20句近い佳句を紹介された。

連続出席24年5カ月で終止符を打たれたが、このような立派な句集「柳行李」が晴ればれと出席して、われわれをよろこばせてくださった。

月間賞杯は正本水客氏にかがやいた。

（受付—児島与呂志・塩満敏）

出席—与呂志・薰風・雅風・敏・千万子・水香・紫香・古方・蘭・漫柳・静歩・滋雀・花梢・万的・与史・としよ・太茂津・佐知子・勝美・肖二・綾女・眉水・夕花・喜風・柳志・とし子・一三夫・邦晴・右近・育園・道夫・形水・瓢太・三十四・牧人・君子・文秋・誓二・一舟・恒明・貞子・次章・川狂子・寿美子・寿子・吸江・凡九郎・栞・美幸・定男・庸佑・柳宏子・あいき・喜甲・智子・み

ずほ・岳人・維久子・度・醉升・幸・鬼遊・弥生・酔々・雀踊子・宇宙太・生々庵・頂留子・小松園・葉子。

席題「割り勘」 羽原 静歩選

割り勘の酒二次会が待っている
 割り勘の女同士でよく喋べる
 割り勘へ紅一点がもてている
 招待された恩師も割り勘払つてる
 割り勘主義そんな課長で勘われず
 割り勘の飲めない分を食べて来る
 割り勘のように場末の雑居ビル
 割り勘を出して中座をして帰り
 割り勘の端数なら幹事払つとく
 先に礼言われて割り勘言いくく
 二度目から割り勘になるランデブー
 割り勘のデートげらげらよく笑う
 割り勘と聞いて財布をたしかめる
 割り勘で食んで別れて明日がある
 割り勘で一食抜いた顔でなし
 割り勘と聞いてしぶらんさつと去に
 ケチ一人居て割り勘を委せとく
 割り勘族香煲にまで名を連らね
 割り勘のメモを渡して見る幹事
 割り勘と聞いて烈しく動く箸
 割り勘と決めかき分ける縄のれん
 割り勘とわかる酔い方をしてはるネ
 割り勘の一人が消えるガード下

花梢
 佐知子
 寿子
 君子
 邦晴
 あいき
 万的
 紫香
 三十四
 次章
 邦晴
 寿美子
 柳志
 夕花
 生々庵
 としよ
 太茂津
 一三夫
 古方
 一三夫
 右近
 凡九郎
 鬼遊

割り勘で学生夫婦箸をとり
 立て替えたまま割り勘の忘れられ
 割り勘の酒は仲間の味が有り
 割り勘の友情のまま夏終わり
 割り勘がすんでさわやか秋の月
 割り勘へそっと寸志を添えてくる
 三遠主義で割り勘にさからわず
 割り勘でしあわせを買う順を待つ
 割り勘にしといてよかった計報来る
 美しい割り勘結婚するまでは
 割り勘を出すと残りは電車賃

席題「空気」

宮尾あいき選

一三夫 滋雀 川狂子 幸 美幸 柳宏子 水客 弥生 綾女 美幸 静歩

隣室の空気察して散歩する
 他社倒産事務所の空気引き締まる
 良い空気吸えば快るよ帰ってこい
 大都会に生きて空気の味を知る
 紅一点帰って会の空気抜け
 俸は空気のような夫がいる
 ふるさとの空気は母の味がする
 まとまるらしい空気に仲間まで笑顔
 ここからは空気もちがう別荘地
 末席で感じとつてる社の空気
 団交の空気はストに這入るらし
 老妻に死なれ空気の抜けた貌
 その場の空気から代表語り出し
 空気銃雀一羽もままならず
 冗談を言えぬ空気が重くなる
 またバック生きた空気がシュツと逃げ
 何となく妻に気付かれてる空気
 圧縮をされると空気怒りだし
 家中の空気が揺れた日の辞令
 初日の出街の空気も生き還る
 産声の確かさ空気押し上げる
 青年が集えば風になる空気
 空気いま私の中で生きている
 家の空気よそこにカンナ送っている

綾女 佐知子 一三夫 智子 一舟 維久子 美幸 綾女 花梢 育園 肖二 勝美 文秋 眉水 柳志 弥生 君子 君子 夕花 あいき

兼題「末席」

神谷凡九郎選

末席へ名妓しらふを見せにくる

優

末席はもうお茶漬をたべている
 末席に顔を消してる敵がいる
 末席はようグイヤが目立たない
 末席のない円卓が気詰りで
 末席で鬼もしばらくくつろげり
 末席へ忘れてたよう酌ぎにくる
 自責点ゼロ末席のさり気なし
 招かれたのに末席で忘れられ
 末席に氷の刃が伏せてある
 票田と見て末席も酌ぎに来る
 末席から歩む花道を呉れた人
 末席のポーズが一番よく似合う
 末席の義理へ懐があいてくる
 水掛け論と知る末席の失語症
 末席に坐りペテン師考える
 末席を汚しました本音だろう
 末席という束縛のない自由
 末席にいます喉が乾きます
 座る気はないのに末席うばい合い

戸倉晋天氏の
句集「晋天句集」

序文・戸田古方・送料共千円
 30年前の日本人の姿がここに
 本社でお取次ぎいたします。

優 度 幸 寿子 右近 定男 滋雀 水客 形水 夕花 水客 宇宙太 雀踊子 べ女

末席にいるのは隅かも知れぬ

末席は一時停車の仲居です

末席の男それから腹が立ち

一宿一飯末席に男いる

末席で警策回れ右をする

末席の無言が気になり落ち付けず

末席にいと眠むたくなつてくる

信念をもつ末席の目を伏せず

末席の男雨具の用意あり

磨けば光る奴末席に見付けたり

末席というても大臣ばかりなり

末席のそれが太閤はんやつた

末席に香車のような人が居る

末席は上手に正信偈をあげる

末席が避難訓練知っていた

末席で時計ばかりを見てしまう

自惚れたとき末席に負けている

末席を汚してと確か言葉じゃ聞こえたが

兼題「誇大」

本多 柳志選

病む人ぞ知る誇大にあらぬこの痛さ

広告の誇大を役所叱るだけ

大げさな言葉自分を見失い

バーの門誇大なゼスチュアで迎えられ

誇大広告返品利かぬ家を買ひ

智子

敏

榎

道夫

水客

古方

与呂志

鬼遊

佐知子

道夫

恒明

一三夫

古方

醉々

榎

育園

智子

美幸

凡九郎

大げさな話を聞いてる馬の耳

誇大妄想の果てに教祖と言ひ出した

新婚のけがは誇大にささやかれ

歌麿が誇大広告したポルノ

ウインドで見たビフテキの厚いこと

誇大広告抜け道ちゃんとしててあり

大袈裟に言い過ぎ実物が小さく見え

戦争の話誇大に言い伝え

誇大しても我が家のルーツたかが知れ

誇大広告山紫水明佳人多々

ポリウムを上げて自分に立ち向う

怪物の誇大ニュースは夢を呉れ

週刊誌の見出し誇大で買わされる

薄幸を誇大してある立志伝

誇大でも何でもおまへん店じまい

拙過ぎた風呂敷辻褄合せて居ず

酌き交す誇大同志に夢がある

宝くじ誇大妄想の列にいる

誇大して出した新聞よく売れる

誇大した海の青さが憎めない

和を守る主義で誇大許されず

誇大広告貧者ばっかり引つかり

煩惱へまた押し寄せる誇大記事

建売りのテラシ駅近庭広し

商魂は殺し文句が誇大すぎ

誇大妄想海はなんにも喋らない

智子

牧人

度

敏

鬼遊

吸江

みずほ

与史

喜甲

醉々

水客

漫柳

育園

夕花

静歩

飄太

美幸

あいき

としよ

夕花

弥生

一三夫

凡九郎

みずほ

喜甲

君子

秋田 實 主宰・不二田一三夫編集

『漫才』

復刊第9号 近日発行 価三百円 送二百円

(寄席に関する川柳欄を設けました。川柳道場ではないので川柳の上達は望めませんがお気軽にご投句ください。)

● 川 大阪市生野区勝山南1-14-17 漫才作家くらぶ

言うたびに逃した魚が大きなり

誇大宣伝するベン先が酔うている

大げさな自慢で過去に負けている

用心をしいしいほらに引つかり

買いかぶられたまま故郷へ帰らない

秀才と才媛でしてとお仲人

誇大広告テラシの嘘と住む新居

誇大広告美人になれる化粧品

斗酒辞せずなどと栄転期待され

輪をかけた話割引して聞かれ

兼題「サラ金」

阿万 万的選

サラ金の内助の功を摘み取られ

ローンかすむとサラ金に追われとり

サラ金を出て真直ぐデートする

サラ金をわかっていながら又かりる

サラ金で買ったピアノに侵される

サラ金に手を出し蔓にからまれる

一舟

幸

幸

小松園

水客

寿美子

維久子

花梢

牧人

柳志

老地樹壇

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

京都塔の会

松川杜の報

バンドの恋のつたニエヌよかったね
置き去りにされし時代と意識する
サンデルの音がアスファルトに粘り
盛装の舞妓はんトイレはどうするの
夏のれん洗晒しの文字うすれ
病院で傘借るほどに覚えられ
呼び捨てにできぬ貫禄もちあわせ
うっかりと呼び捨てにして仲がばれ
呼び捨てを許さぬ眉毛太いこと
生意気にもう呼び捨ての友が出来
呼び捨てで貰う仕合わせが解り
親の癖意外なとこで子は真似し
胸毛から男の汗が湧いてくる
呼び捨てでくれる母あり父があり
どんぐり川柳会
谷垣史好報

美穂 誠史 求芽 杜的 笛珠 潮花 三求 和友 紫香 白溪子 よし子 水客 飛鳥 好郎 酔々 惠美子 吸江

菜の花句会

高杉鬼遊報

没法子風に流れる雲となる
つらいこと忘れ良いことのみ思う
人生の旅路辻々に湧いた雲
つけまつ泣くも笑うもほどほどに
幽霊がまたもや轢かれそうになり
SOS金斗雲は降りてこず
犬の世話だけの老後と犬も知り
美しく敗れた雲の外に
心中の女にあったつけまつげ
母の手をかりて晴れ着の蝶結び
選挙人名簿に幽霊間借りする
ホステスの居眠りまつげ起きている
ゆうれいに足のあるのが金をとり
忘れてた頃に届いた請求書
踏切へ出る幽霊は母子連れ
世話好きの叔母に写真をまた取られ
幽霊へローソクの灯がやせてくる
悪人のまつげに余罪見えてくる
アルバイト幽霊してるとも云えず

真砂 美幸 サヨ 鬼遊 飄太 痴亭 勝美 薰風 弥好 史生 牧人 綾女 凡九郎 秋美 鬼遊 史葉 漫柳 弥生 頂留子 辛生 紀美代 小松園 鶴声 夕花 雀踊子 酔々 肖二

どうしても忘れられない平手打ち
川柳ささやま 河原みのる報
よい天気どの田も揃た稲の出来
八分ど揃たらしいと畑を浸け
産声へ揃ていたかと胸をなで
嵯峨ひとり行く小説の一ページ
自叙伝の書ける人生送りたい
灰色の実話小説が黒にする
おぼはれも新聞小説よう話し
小説で先ずよかったです涙ふき
面白くついつい立読み涙がとがめ
打ち水の庭夕刊の届く音
終点まで行く夕刊を三ツ買う
酒出したばかりに口止め喋り出し
口止めをしてから不安尚つのもり
口止めという名の鍵の頼りなさ
口止めの飴溶けぬ間に孫しゃべり
幸福な孫十七人がみな揃い
顔ぶれの揃いを司会あこでよむ
川柳高知 川竹松風報

美幸 八陣 みのる 千代子 喜美代 とよ子 百合子 近江 和人 深月 まどか 可住 越山 無鬼 掬水 春香 文平 ゆきお 亀野 たかし 窓花 豊栄 麗サ ヒサ 天花 星雨 美江 柳翠

潮の香をのせ民宿のお献立
一筋に愛しくして捨られる
汗匂う農ひとすじの黒い肌
言ひ訳の出来る仲間と三次会
一筋の道み仏にある慈眼
複雑な家庭に見たり蟻地獄
青春貴族喋りやめると何もない
太陽が沈んでからを稼ぐ女
沈む陽に未練たらしく負けチーム
南大阪柳柳会
中川滋雀報

秋 翠
菊 野
海 州
節 子
一 人
恭 一
美 和
松 風
芽 十
千 子
思 月
頂 留
恒 明
肖 雀
鎮 彦
一 舟
好 郎
智 子
文 秋
久 子
好 一
あい 子
君 子
凡 九
綾 女
雅 風
小 松

川柳車大坂
竹中肖二報
遠廻しに云うてポイント突いている
ポイントを把むと抜け馳けしてみたし
ポイントにするオッパイを押し上げる
甲論乙駁ポイントが皆違い
花芯までぬくもりありそう寒牡丹
百匹の蝶を集めて白牡丹
丹精の牡丹へ命の中したボール
白牡丹の咲いたあたりが暮れ残る
花ばさみ牡丹の涙見てしまふ
斗病記爪の色とも話し合ふ
グラス持つ真赤な爪が嘘をつく
健康な爪で織り子の夢も織り
あやつりの糸へ素直に踊つてる
強情も結構金で動かされ
あやつつたつもりが上手にあやつられ
黒い手のびて汚職へあやつられ
動くもの動かぬものも明治村
よく動くひよこが売れる夏祭
踊り子の足の動きを追うライト
月給日ほくほく歩く虹の町
八木摩太郎報
喜風
好一
千代子
鎮彦
綾女
好一
儀一
三十四
柳信
雀踊子
凡九郎
肖二
美子
文子
右近
誓二
あいき
恒明
文秋

逆立ちも仕そな嫁が来て平和
ポケットの中で思案してるゴミ
ゴミ一つ出ないで工場閉鎖され
観光地ゴミはお客の置きみやげ
ここ掘ればゴミが出てくる犬を飼い
粗大ゴミおふとんだけが持ち去られ
旅人の夢は泉に遠すぎる
名月のうつつも泉をくみ惜しむ
この泉までも野鳥をしめ出しぬ
無駄使い多過ぎる世ばやく老
土地売った札束ムダを引き寄せる
無駄でないアジサイ妻の七変化
退院と聞いてよかった無駄な足
忠臣の死を無駄にせぬテレビ
西宮北口句会
小浜牧人報
夏休み避暑の民宿ではしやく子等
千世子

佳句地10選

(前月号から)
藤田軒太楼選

睨まれた番犬天に向いて吠え
もう一度逢えるチャンスの傘を借る
子が帰る頃よと手の甲つねられる
トマトの赤に貧しい臍が救われる
見合いから淋しい父にして終い
昼売れぬ品を夜店の目玉にし
片隅の意見が痛いとこを衝き
友情を信じた手から砂こぼれ
祝酒派手にこぼして目出度がり
ゆづられた席のぬくみへ小さく座す
美幸
千世子
本除棒
牧人
入仙
登美也
柳宏子
虎秋
小松園
雀踊子

吹き出したビール元氣な父の笑み
太陽の真下子供ミニブル
溜息を洩らすべくに救われる
生家いま海の音だけ変らずに
日まわりなたしなめらるる著を言わず
線引きをしても変らぬ海の色
この切符渡せば第二の世界が待つ
愛猫のデートへ少し開けておき
誰もいぬ海へ心を打明ける
スラムプの飲み過ぎる日が多くなり
シグナルの青を牛歩できた米寿
ラッシュアワーの流れの中に一人いる
老醜を隠す奇麗な色を選ぶ
逃亡の海鳴りを聞く風船まつり
桜貝乙女の海は澄んでいた
引返えず橋がもうない決意です
川柳後案(岡山市) 井上柳五郎報
父ちゃんの無口母ちゃんカバーすを
無口でも飲めば美声でよく歌い
お見合の無口に一生だまされる
無口のチャック開いたワンカップ
昔日のおもかげもなし無人駅
無人駅ラッシュアワーで生き返り
無人駅今年もコスモス乱れ咲き
無人駅集札函が礼を言い
出稼ぎの父が帰った無人駅
無人駅町の子を待つ蟬しぐれ
夜と昼過疎線りかえすビル忙し
都市砂漠ビルの谷間に四季がない
掃除婦も颯爽としてビルに消え

正 祐
メ 女
無 聖
みよ子
ろ 山
笑 女
政 甫
婦 美子
豊 子
半 歩
清 川
喜 久甫
牧 人
伊 升
泉 女
紅 扇
川 柳 五郎報
昌 吾
博 友
佐 加恵
柳 五郎
勝
正 道
元 一
恒 洋
久 米雄
照 路
廉
哲 郎
胡 風

ビルの腹電光ニュースにくすぐられ
お茶を飲みテレビを見て忙し
忙し頼まれもせぬ世話をやき
幸せは仕事作って忙しい
オースケイ川柳会 大坂形水選
夜店にも親代々のれんあり
カブト虫夜店の人気をひとり占め
雨やめばにがり水にも虹浮かぶ
水増しの帳簿が人生狂わせる
ジャンケンの手がままならぬ三才児
酔倒れそれでも顔に新聞紙
早起き快勝の余韻読みかえす
新聞の死亡欄見る歳のせい
新聞によつて真実遠ざかり
じゃんけんポイあいこで何を出そうかな
じゃんけん弱い星とは生まれつき
じゃんけんの声も聞こえる新婚さん
スポーツ欄抜げて欲しい横に立ち
じゃんけんに弱いキャプテン選ばれる
じゃんけんに敗けた女の手がぬくい
梅雨晴れ間夜空は活気ついでいる
夜店でもちよつと下火のたいやき屋
許せない噂は水にすぐ流す
じゃんけんもめつたにしない年になり
川柳しんぐろ 大輪報

秋 月
ひろし
定 平
たけ志
秀 川
みどり
西 浦
幸 坊
諸 岡
常 夢
有 一
聖 地
一 扇
亞 成
博 泉
一 念
野 生
形 水
弥 生
入 仙
大輪報
雀 踊子
武 雄
緑 楼
とよ子
寿 子

いよいよという日に金が借りられず
解決にいよいよ労使腰据える
ふる里はいよいよ瓦に草が生え
鬼ガワラの目に世の中の生る事
十年の肩の荷下ろす保証書
保証ない明日だかやつぱり夢をもち
確実な保証が欲しい老の道
保証印数字の数に手がふるえ
福笹の保証は宝くじに似る
不況下の商戦きびしく割る定価
定価表ひそかに妥協の余地を持ち
自画像に高い定価をつけてみる
品質を定価で判断する素人
定価では買う気ないのに長居され
定価表女は高い方を見る
南海電鉄川柳部(大阪市) 辻圭水報

富 子
榮
十 郎
里 美
溪 水
澄 孝
柳 香
弘 生
華 水
凡 九郎
与 史
千 寿子
まき子
大 輪
摩 天郎
圭 水
維 久子
宏 子
恒 明
柳 信
邦 晴
千 万子
川 狂子
勝 美
清 女
雅 風
ミツエ

うみなりの川柳会 (鳥取市) 由多香報

頑固さが暑中見舞の墨をすり
暑中見舞宿の予約も頼まれる
安静を解かれ生甲斐試歩の徑
核家族死ぬまでぶらぶらしておれず
娘の水着借りて焼け方まで若く
ぼける手も使って妻にある特技
半ズボンすねをくすぐる涼しさよ
仕掛花火みじめにくる消えかかり
窓白くぼけて孤独の背が寒い
陽やけた顔を見るよな見舞状
見物の顎を火花が吊り上げる
ぶらぶらは無しエリートは早や課長
フンドシの老漁夫カメラ気にもせず
ぶらぶらのほんとは哀しさ泣きに出る
行くあてはない涼しい北の地図
打水のみどり靴音軽くさせ
異性の目集める水着で溺れない
暑中見舞まだ父の計を知らぬ人
ためらわぬ水着女の線描き

川柳塔まつえ

路地の奥やはり気になる大地震
暗い部屋曰くありげな女独り
模擬地震退避の顔も模擬を見せ
前以て地震を知っていたもぐり
師の曰く俺を追い越す人となれ
神曰く人間は勝手な動物だ
温泉にひたり左遷の地とは思えまじ
家系図に曰くがあつて嫁きおくれ

美智子 行子 吟月 笑王 純平 熊生 雄人 源太夫 蕨士人 希満子 喬水 夕路 善堂 とし江 無人 辰春 独歩 豊生 由多香 祥月報 愚童 みる 早苗 登美也 雅逸 鶴丸 孤呂二 叮紅

曰くある品は質屋でかくれんぼ
川柳わかやま 津田与史報
老兵の黻八月に深くなる
転んでも男と女という違い
柱時計家庭の裏を見て倦かず
添削に愛の鞭ふるボールペン
お役所の紐付ですとボールペン
家計簿へペース崩さぬボールペン
転んでも我慢で走る母のひざ
転ぶまで痛さを知らぬ馬鹿でした
人生を転んで生きた城塞く
運命ヘダルマになって又転び
よけそこねばったり転ぶ間の悪き
風転の枯葉は土に還えられず
蟻の列転ぶ一匹見当らず
掛時計明治の彩の音で鳴り
波面をつくって受付時計見る
逢える日の時計の振りが歌になる
秒針が慣れぬ司会を責めたてる
修繕に通う私に似た時計
後継もなく老いてゆく祭笛
出稼まの金が届いた秋祭る

祥月 史報 津田 千寿子 与史 善彦 緑楼 としよ 和子 英子 祥月 京子 福水 裕美 佐知子 公子 登紀夫 白光子 十郎 和尚 和女 板垣草丘報 虎秋 河南 独仙 夢醉 多賀子 晴月 泰之

急用が相場場の損とすぐわかり
のどの奥見返は欠伸の二連休
押し寄せた波は遅く時知っている
老翁な炎の奥は伏せておく
山奥の廢墟に風は童歌
招く海こわさを知らぬ子に疲れ
招かざる客は時間を気にしない
涼風は此処だと招く浜の松
もう冬のコートが招くウインドー
急用ヘガスの元控しかと締め
招かれた理由が解らぬ顔が寄り
怨念の風化は老いの胸の奥
川柳たけはら 森井菁居報
誓いの言葉いと厳かに合う呼吸
それぞれの顔それぞれ七回忌
小首か上げて三才のもの思い
独身よさらばきれいに髭をそる
照準を合わせた男四肢を踏む
内職の妻の強気を叱るまい
素晴らしき再会神様ありがとう
写経から煩惱の字が見えかくれ
サラリーへ美しさを盛る妻の膳
髭を剃るときめくものなく四十
みやげ屋がとぎれてからの子の欠伸
家族旅行新かん線がすばらしい

醉歩 春梢 露二老 露幹 主詩朗 水煙 みのる 可保留 正朗 芳子 軒太楼 居之助 静水 文晴 笑子 蘭幸 洋之祐 鬼焼 房子 鈍舟 花炎 不朽 愛

川柳塔柳箋

一冊百五十円・送料二百円
二冊なら送料は三百円です

準大賞妻が酌ぐから呑むとする
上弦の月へ届かぬ狂女の手
一門展眺めた火花が炸裂す
手相は長命にして病んで
国鉄に勤めてストを禁句とす
洗ってもおちないしみをもっている
何処までも凡人悔いがつきまとい
鈴の音を追い花道に背を向ける
ほんのりと酔うて日本一の父

倉吉打吹川柳會

奥谷弘朗報

歩道橋廻り道だときらわれる
きょうはまた歩行者天国廻り道
廻り道しても寄りたい孫の家
不案内もと来た道に舞い戻り
社長でも廻り道した過去があり
廻り道だったがやつと結ばれる
人生は無駄な日もあり昼寝する
年金で暮らす余生に無駄が無い
高度成長無駄も一緒に成長し
煩惱はくよくよ無駄を考える
つき合の重石に押しされ無駄使い
無駄ばかりする父はパーで飲み
切角の厚意もついに無駄にされ
無駄口が過ぎて昇進見送られ
軍艦マーチ日本大きな廻り道

駒つなぎ句會(大阪市)

岸南柳報

菁居 勇気ありそうに云うて先に逃げ
紫光 履歴書の嘘を通して役にいる
節夫 出直して肩書のないつらさ知り
貞子 出直して灘を一本さげて来る
英詩 出直しの耳へ悪魔が囁いた
政己 出直しが遠回りなる二枚舌
一路 出直しの旅も朝から雨の音
西合 出直した善のこの道元める
かつ子 出直しが出来る併せかみしめる
酒合 出直して今日のデートが雨になり
みなと 職安で出直し無理とさくらされ
夕路 出直してこいと無心をしりぞける
すゑの 出直しの男の髭が消えている
碧水 出直しへ鼻緒のきつい下駄を履く
勇峰 出直しを誓って帰える星のみち
弘朗 城北川柳會
満春 川口弘生報
きみの 切り身半分が暮しの目が刺さる
律子 金婚へ銀婚素直な耳を持つ
寿雄 著二本創意の起源知りたくて
きくの 著とめてふと有難き今日の事
小生 長寿善受けて食事も正常に
千恵子 外孫の箸を両手で頂戴す
露杖 敬老の心は家風に育くまれ
石花菜 台風へ土下座ばかりはしとれんぞ
茂子 風呂の湯を半分にしてパパの唄
綾女 長寿の箸貰って一人苦笑する
雅風 千代紙で團圓が祝う養老院
風子 半分に聞いて天狗を褒めておく
反対をしても半分気にかかる

小 規不風
路 はんやを
勝美 敬老も一年一年にちぢめられ
肖二 空つ腹著もせわしく使われる
つとむ はしやいで箸を落して又笑い
宏子 和歌山七面句會
善信 祭り笛むかしの距離を駆けて来る
恒明 意地かけるほどでなかつた人という
育園 はとの城はとの屋根にも好き嫌い
祥恵 骨董の意地は勲章なども要らぬ
深 海峡の広さへ意地は生きている
千代三 村祭どこも彼処も孫曾孫
美代 トタン屋根野菊のような人が住む
岳人 同じ屋根に住んで団地の敵味方
小松園 本暮きの構え崩さぬお家柄
弘生 意地でないことを無言の目で話す
きみ そこが男の意地ですと妻が言う
凡九郎 若い衆祭太鼓にドンと来い
満津子 ふる里は遠くニュースで知る祭り
秀村 信号が祭の神輿二つにし
喜洗 ハワイ川柳ウイロー社 林 蒼蛇楼報
道子 首長く待った挙式がまた延期
三十四 サケの首二百海里に生きている
惠美子 首つたけ惚れてたあの娘嫁に行き
つね 物価高首をひねって物を買
ふみ 放蕩児母の涙に首を垂れ
恒治 縦に首振った後から娘泣き
ますえ 首ひねる医師の目付きが気にかかり
体操は首の運動から始め

弘 右近
千子 喜代子
玉子 喜代子
炳齊 喜代子
中筋三幸報
佐知子 富子
太茂津 寿子
勇次 晶子
知也 武雄
隆恵 秀市
光治 秀市
ふく代 三幸
蒼蛇楼報
黄塵 一葉
紅溪 蒼生
拜山 十吉
風影 公女

義太夫は三味に合わせ首を振り
あなたには首ったけだと気を持たせ
その辺でやめろと合図の首を振り
社の為めの直言首も覚悟なり

板ばさみ首の廻らぬ羽目となり
首すじに深水の筆極わまりて
定年の首の若かきを持てあまし
首実検よもや我が子も居ようとは

ひんやりと首をすくめる一しずく
チト臭いばらひ儲けに首をふり
首ったけ惚れて居るのに言い出せず
白黒をはっきりさせて首になり

三井ヶ丘川柳会
海の高田博泉報
海のお金とどけるべきか明日となる
オーロラ海青春の夢が生きて

手の甲に附録のようないほ一つ
一生を附録でもよいについてゆく
迷子の機嫌を取って届けるとき
行き届く人柄我も同じ年

戦後には附録のような混血児
本誌から附録がこぼれ落ちそうな
海女悲し我子奪った海に生き
筆不精中元届いたので電話

天下り附録のような秘書がつき
停滞の先は海まで続いている
母を恋う少年Aは海に佇つ
人生の附録となった定年後

夜光虫キラキラトラポッドで垂れる糸
海の兎に行儀を言っても始まらぬ

曉舟

辰朗

蒼蛇楼

秀山

草海

峰円

万里歩

カロー女

椰子郎

北海

三石

雪女

惠美子

竹生

恒明

崖つ縁覗けば海が騒ぎだす
一枚の紙で届けて夫婦です
つぶやけば心の届く星である
いもの子を洗う海でも行ききたがり

附録だけ残しますと呉れはった
赤汐の方へ泳がぬ雑魚の群れ
風呂の底足が届いた子の笑顔
人生の附録豊かに古稀を越え

虹川柳倶楽部
新岡回天子報

一と筋の糸にはじまる蜘蛛の網
防災を誓って殉死碑除幕式
お若けエのに席をあけると詰め寄られ
三十三回忌読経の声浦々に

声だしてテレビに笑う老夫婦
光すばらしき恋人良妻とも言えず
祭酒の酔が取り持つ縁結び
女には商品になる笑顔なり

耽読に降車の駅を乗り過し
読み疲れ書を藤椅子の顔を伏せ
縁結びわが娘はついにむすびかね
目と鼻に抜ける山葵の味に惚れ

本棚へこれだけは読もう読書の心意気
ゆーもあ川柳会
檜谷漫柳報

腑に落ちぬ値段段へ小鯖の目と出合い
おいでやす言葉一つも京女
選挙ポスター嘘つきそんな顔ばかり
もぎたての真赤なトマト夏を噛む

捨て石のようで睨みが利いている
おせっかいこっちは財布と飲んでいます
戸締りをせずに交番いつも留守

度

凡九郎

静歩

古方

小松園

眉水

牧人

五木

照沖

実

婦岩

菊治

春吉

一竿

金志郎

昭和52年度 大阪文化祭

第29回 川柳大会

日時 10月10日(月) 10時開場
会場 中央公会堂(3階小集會室) 地下鉄「淀屋橋」中之島公園内

講演 「難波の文化と大阪城」
大阪市立美術館学芸課長

兼題 「子煩悩」 秋山 進午氏
「花」 久保田以兆選
「凡人」 谷口 光穂選
「高原」 菊沢小松園選
「嘘」 堀江としを選
「近頃のニュースから」 岩井 三窓選

席題 当日4題・各題2句・締切1時
・出句は出席者に限ります。
(兼・席題共、当日会場で受付
兼・席題の秀句に府知事・大阪
市長・府市教委長から「川柳賞
」選者から「選者賞」を贈呈。

賞 入選句集代三百円、当日申込受
付

句集 主催・大阪府・大阪市・大阪府教育
委員会・大阪市教育委員会
協力・各柳社・協賛・日川協

廣瀬 反省選

虹汀

勝一

朴竜

虹汀

優

無

・募 集・

十二月号発表 (10月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵 選
 水煙抄 (10句) 菊沢小松園 選
 愛染帖 (3句) 橘高薫風 選
 課題吟 (各題5句以内)

「七面鳥」 三宅不朽 選
 「ゆず湯」 村上旭童 選
 「社会鍋」 小谷仙山 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
 ★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

一月号発表 (11月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵 選
 水煙抄 (10句) 菊沢小松園 選
 愛染帖 (3句) 橘高薫風 選
 課題吟 (各題5句以内)

「晴れ着」 吉岡美房 選
 「手網」 松下たつみ 選
 「鶴」 山本素郎 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

一人の遅稿 大ぜい困る

定価 四百円 (送料29円)

半年分 二千五百円 (送料共)
 一年分 四千八百円 (送料共)
 昭和五十二年九月二十五日印刷
 昭和五十二年十月一日発行

大阪市南区観谷中之町二〇番通
 編集兼 中島蓬太郎
 発行人 藤原童心社
 印刷所 藤原童心社

郵便番号 542

大阪市南区観谷中之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話 大阪・二七一―三九八五番
 振替口座 大阪・三三三六八番

本社 11月句会は7日6時
 会場 金属会館
 題 「瓶」「染める」
 「配列」「城跡」

本社12月句会は7日6時
 新年句会は1月9日6時

常任理事会

10月4日 (火) 5時～7時
 11月4日 (金) 5時～7時
 12月3日 (金) 5時～7時

53年1月は休会します

2月3日 (金) 5時～7時
 3月3日 (金) 5時～7時
 4月4日 (火) 5時～7時
 5月4日 (木) 5時～7時
 6月2日 (金) 5時～7時

お買物は
 4都を結ぶ
 大丸へ!



大阪・東京
大丸
 京都・神戸

52年度二賞きまる

★第12回路郎賞と第11回川柳塔賞が決定した。毎年このころには芥川賞も直木賞もすでに決まっている。うちの二賞は、この芥川賞と直木賞がヒントだったが、あの選考委員評がたのしい。A委員がトップに推した作品を他の委員が全然歯にもかけなかった。こんな場合、A委員の面目は丸つぶれである。10篇ならばの候補作でさえこのとおり

だから、60篇からなる路郎賞が満場一致できまるほうがおかしい。

★路郎賞の森井善居さん、川柳塔賞の西山幸さん、おめでとうございます。

魯魚の誤り

★「川雑」時代、同人吟や一般吟は全部清記したもの、路郎先生は万一、印刷所などで原稿を紛失した場合を考えての配慮であるが、この清記が大変である

葉子コーナー

▼「ロダンの彫刻で「青銅時代」という作品は右手を頭にのせているので、右ひじの下が空間になっている。そのあたりが造形のポイントらしい。

▼ここに物など置いてはせつかくの彫刻もだいいなしてすね。

▼日本画にも「余白」という言葉がある。部屋の調度品の置き方にも同じ事が言えるのではないでしようか。

▼我家は狭いので余白など言っておられません。せめて心にゆとりを持ちたいと思っています。

る。故後藤梅志氏によく手伝わっていたのだが、あのややこしい柳箋の文字を一字一句まちがえぬようにするのだから、考えるだけでもゾッとするものがある。

「ぼくを含めて、いわゆる魯魚の誤りをしなかった人は、ただの一人もいない。神様はいなかったというこゝとである。句を読みまちがえるか雅号をまちがえるか、毎月何字か校正で訂正している。「ぼくの場合は誰にも見て貰えないのでミスが目立つだけである」

★そんなわけで、川柳塔になってからは清記をせずに印刷所へ回わしている。魯魚の誤りをさけるだけでなく、同人吟や一般吟を選者から受取って、どなたかに清記して貰うとなれば、どうしても四、五日は雑誌が遅れるであろう。路郎先生が危惧を抱かれたように、原稿に万一のことがあれば、そこまでは考えていないが、ぼく自身、原稿をカバンに入れてある日は、お茶を誘われてもついて行かないことにしている。万が一のことがわいからだ。



ご進物に重宝な
近鉄の商品券

★500円から50,000円まで各種ございます
先様にお望みの品をお選びいただける
手軽で便利なご贈答品です。ご進物には
近鉄の商品券をどうぞ

近鉄百貨店

アネホ店 06624-1111 / 上本町店 06679-1231 / 奈良店 07421-33-1111

★本社句の清記はご承知のように河井庸佑にして貰っているが、急ぐ日は句会の日の中にも届けてくれる。こんな無茶は他人様には頼めないが、届けられた二百数十句を短時間のうちに清記をするのだから、うつつし遅いがあったりまえだし、それに句箋の文字がかならずしも正確ではない。だから印刷所へ回す前にはかなりの朱がはいる。句者が「老」と書き、選者も「老」で抜いた句が、どうしても「考」でなければならぬ句意である。句者の書きがちが、選者の読み違いかも、と思うが一句の中に二字も「老」も考えこんでしまう。しかし「魯魚の誤り」をおかすことになると、本になってから訂正がないとなれば「考」が正しかったのであろう。とにかく他人の書いたものを正確にうつすということにはむずかしいことである。

王選手栄光の一本足

★9月3日、アーロンを抜く756号が出た。ボクは8月15日に左脚が肉ばなれた。これは世界記録に關係ない。(不二田一三夫)

肉体疲労時の
ビタミンB₁補給に

カッケ
(脚気)
アリナミンA

☆筋肉痛・肩こり・腰痛・神経痛の緩和にも
☆アリナミンA25ミリ錠のほか5ミリ錠



タケダ

昭和四十二年九月二十五日
昭和五十二年十月一日
印刷 刷行「毎月一日発行」
印 刷 刷行「毎月一日発行」
種 郵 便 物 認 可

川柳塔

十月号

陽気なワインと
呼ばれています。



サントリーワイン
デリカ

- サントリーワイン〈デリカ〉
 - 赤・白・ロゼ……………各600円
 - スペシャル 赤・白……………各800円
 - サントリーワイン〈デリカ・タイム〉
 - 1,000ml 赤・白・ロゼ……………各800円
 - 500ml 赤・白・ロゼ……………各450円
 - 200ml 赤・白・ロゼ……………各200円
- 価格はすべて標準的な小売価格です。
(製造・販売サントリー株式会社)

美の殿堂 大和文華館

平城京をめぐる山々を一望の
静かな環境にある大和文華館
は 日本建築の特色に近代美
を生かした美術の殿堂です
収蔵品も日本・中国を中心に
国宝・重要文化財を含む 有
数のコレクションです
観覧時間…10時～17時

▶ 近鉄奈良線 学園前駅すぐ

近鉄



定価 四百円 (送料 二十九円)